
天使にしふくを

上谷七人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使にしふくを

【Nコード】

N0957Y

【作者名】

上谷七人

【あらすじ】

少年はその昔、天使の話聞いた。

仕立て屋の徒弟である「ダリオ・カルツァ」はある日、上流から流れてくる一艘の船を目撃した。

その船に乗っていたのは、華やかな法衣を着た少女「クレメンティナ・リサリーティ」。

少年と少女が出会うとき、“天使”のいる日々が始まる。

舞台は川と海に囲まれた大都市“フォネツアーレ”。
様々な人と人が交錯するこの水の都で、天使をめぐる物語を描く。
どろどろだけどちよっぴり爽快で、深刻だけどこかおかしい。冷
たくて暖かい。

そんな、中世ファンタジー！

天使に会った日(1) (前書き)

> i 3 3 8 8 6 | 4 3 0 3 <

ILLUSTRATION 一色恋

天使に会った日（1）

少年はその昔、天使の話聞いた。

むかしむかし。

旅路の商人を問答無用で斬り殺し、小さな村と見れば奪えるものはすべて奪う。悪逆非道の限りを尽くしたような、盗賊の長がいた。その悪人たるや、幼子のころから悪法を振るい、盗みを働き、その悪性は屈強な騎士ですら恐怖したという。罪の上に罪を重ね、神から捨てられた罪人。誰もがそう思うような、人の子であった。そうして数十年と生き続けた罪人だったが、ある日突然、その身が炎につつまれ間もなく絶命するという、壮絶な最期を遂げ、その人生に幕を閉じた。

だが、自分の盗賊の話によると、周囲に火の気はまったくなかったというのだ。

その噂はたちまちに広まり、人々の歓喜の内に一抹の不安を残すこととなった。その時代の、後に「聖王」と呼ばれることとなるマクティオス教皇はこれを憂い、聖地に民を集めた。

そして教皇は、罪人は神によって救われ、その救済は神の御使いが代行したのだと言う。

曰く、人は土塊から生まれ、神の使いは炎から生まれる。火は始まりと終わりの象徴であり、魂を浄化する。故に、彼の者はその魂を燃やすことによって救われたのだと。

それを聞いた民は騒然とした。信徒は、いや人は、かならず何らかの罪を背負っているのだから。次は自分が燃やされるかもしれない。その想像は、流行病のように広がった。周囲の熱気दैかいて

いた汗は、途端に悪寒となり、誰かの嘆きがまた別の誰かの嘆きとなる。中にはその場でひざまずき、懺悔する者もいた。

恐れることはない。彼の者は幾度となく神の救済を拒絶したが故に、裁きによる救済を受けたのだ。神の声に耳を傾ければ、そのようなことには決してならぬ。

そして、神の御使いは自分の元にもきたと教皇は言う。祭壇の中心に立ち、両手を大きく広げて、何事かを叫んだ。民の皆々がその意味を理解できなかつたが、それもそのはず。

教皇の言葉は、異国の言語だったのだから。

神は御使いを通じ、教皇に異国の言葉を授けたのだ。

民はその言葉の内に、まぎれもない天を見た。

教えを広めよ　神は、そう言っているのだ。

こうして、「神の教え」は国を越えて広がるようになった。ほぼ同時期に「帝国」が破竹の勢いで進軍を行い、瞬く間に領土を広げていったが、教えが広まったこととはまったく関係ない。　と言われている。少なくとも、教皇と皇帝は口を揃えてそう言っている。まあ、今はその話は捨て置こう。

この奇跡の物語は実際にあつた出来事として語られ、一般的に「悪罰聖言」と呼ばれている。近ごろでは年季が入ってきたせいか、地域や語る人によってさまざまな脚色や誇張がされているが、つまるところ、悪人には罰が与えられ、聖人には言葉が与えられるという、教会からのありがたい教えだ。大抵の子供は耳にタコができるほどの話を聞かされ、最終的には自分で語って聞かせるほどになるか、耳クソをほじりながら聞くようになるかだ。

だというのに、少年はその話がなによりも好きだった。少年は父にせがみ、またそれを面白がった父は、少しでも内容が変わった「悪罰聖言」を聞けば息子にそれを聞かせてやった。

人生の心得を諭す英雄伝説よりも騎士が貴婦人に語る愛の作法よりも、その話に惹かれたのはきつと、自分にもっとも近いことだと

思ったからだ。

それは、この話をはじめて聞かされたときのことだ。

少年は子供らしい、純粋な疑問を父にぶつけた。

みつかいは、かみさまなの？

父は答えた。

いいや、御使いは私たち人と同じ、神によって生み出されたんだ。御使いは私たちよりもずっと神に近い存在だが、私たちと同じように人格を持っているんだよ。

御使いとは、天使のことだ。

天使は物言わぬ偶像ではなく、意識ある物体だった。話を聞けば聞くほど、天使という幻想に憧れた。傲慢で、反抗し、自由な意思を持つ。中には神が嫌いな天使、人が嫌いな天使、なんていうのもいたという。

少年は、天使は人と変わらない存在だと思った。

それこそ友達を想うような気持ちで「自分の中の天使」を、ぐるぐると考え続けた。

夜の光と言えば蝋の火と月の光で、足下すら見えない暗闇は自分の頭の中そのものだった。闇の中に手を伸ばせば、なんでも、どんなものも掴めると思っていた。

どこか遠くから、獣の遠吠えが聞こえてきた。

それでも少年の笑顔にはヒビひとつ入らない。

安い獣脂の蝋はとても臭くて、火を消してもすぐには眠れなかった。だからこそ少年は、暗闇の中に天使を見たのだろう。自分の世界が崩れないように、じっと息を潜めて。だけでも、我慢ができなくなつて、夜の闇に笑いが噴き出すこともあった。

それは、彼の日常で。

それは、幻想を夢見た少年の話だ。

フォネツアーレは、川と海に囲まれてできている。

本来は郊外に点在しているはずの職人たちを都市内部に集めるといふ、極めて特殊な方針で都市を構成し、今日では周辺諸国の中でも屈指の技術力を有している。数ある国の数ある都市の中でも、「職人の都市」の顔を持っている場所だ。

これが、一般的な、フォネツアーレという国に対する評価である。もちろん「それ以外の顔」も持っているはずだ。

水の都。フォネツアーレ共和国の首都、フォネツアーレ。都市の物語が、始まる。

検品をしていた手が止まる。ひとつ前の麻布よりも質感が粗い気がする。

試しに他の職人たちがやっているように、布を触っていた指をなめてみた。泥の味がして、たまらず唾を吐き捨てる。こんな方法でわかるものか。おそらくこれをやっている奴は、「かつこいいから」とかそんな理由でやっているのだ。そうに決まっている。

今度は両手を使って別の麻布と比べてみると、あきらかに粗い造りだとわかった。最初からこうすればよかった。

徒弟。ダリオ・カルツアはため息をひとつ。

「おい。これ変なもん混ざってるぞ」

ダリオは不機嫌そうに麻布を川路から運んできた川運商のリカルド・バッチに押しつける。

リカルドは大袈裟なほど肩をすくめて、「俺を睨むなよ。織布工がやったんだろ」

取引相手だというのに、まるで見下した態度。それもそのはず。かたや齢十四の徒弟、かたや齢三十八の川運商。身分が高いわけで

もない、自分の娘とたいして変わらない歳の男に、こびへつらう道理などないのである。

それはダリオも理解しているようで、騒ぎ立てるようなことはせずに口をへの字に曲げたまま、無言で不良品を渡す。衣服にもならないような素材を混紡するのは、仕立て屋と織布工とのギルド間で結ばれた協定に違反している。たかが一枚の麻布程度で互いの関係に亀裂を入れるようなことは、誰も望んではない。ではどうなるのかと言えば、次の仕入れのときにこっそりと麻布が一枚増えている、という仕組みになっている。

よくある話だ。

大量の商品の中に、「うっかり」少量の不良品が混ざっていることも、よくある話だ。

ようするに、騙される奴が悪い。

エヴェル川上流から運搬船が、ここ西ガヴリー港に着港するのは、まだ日が昇る途中、二練の鐘が鳴って寸刻経ったころ。

つまり積み荷を受け取る職人たちは、それよりも早く河港に待機していなければならない。なぜかと聞かれればそれは川運商は郊外に居を構える田舎者ばかりで、放っておけば間もなく荷物のことなど忘れて三カ所ある商業区のどこかで遊興にふけるからだ。そうなれば最後、どんなに運がよくても次の鐘が鳴るまで待つことになるし、その日の荷物を受け取らないまま川運商が帰って行くことも珍しくはない。そしてその後には職人を待っているのは荷物ではなく、親方の容赦ない拳というわけだ。一方で川運商のほうはこの水の都市にとって不可欠な存在なので、ひとつやふたつ仕事が減ろうとも困らないというのだから、職人とはまったく損な役回りである。

無論、そんな川運商ばかりではない。例えば目の前にいる中年親父、リカルド・バッチはまさにそうである。今日もダリオが着くよりも半時間ほど早く待っていたそうだ。事前にチップを渡す約束でも取りつけておけば、そういうこともありえるが、リカルドはチッ

プを受け取らずともひたすらに相手を待っている。そのため川運商の間では、変わり種として浮いた存在であり、ちょっとした有名人でもある。

だが取引相手としてそれなりに顔を突き合わせてきたダリオは、その動機が決して誠意や善意といった、友好的なものではないことを知っている。

直接尋ねたわけではないし、聞きたいとも思わないが、そうに決まっているのだ。

数多な種類の人間を見てきたダリオは、心の中でそう断じている。「そういや、ここにくる前にプリエーツアに寄ってきたんだけどよ」リカルドが喋りながら、視線を自分の船の一端に向ける。そこにはまだ紡績されていない、大量の麻があった。

プリエーツアとはフォネツアーレから北側にある、小さな農村だ。国土が小さいフォネツアーレは、食料になる農作物ばかりを作っているため、プリエーツアは国内で唯一と言っていいほど、麻栽培を行っている村でもある。ダリオが検品している麻布も、間違いなくプリエーツア産であろう。

それで？　ダリオは視線で先を促す。

「いや、何があっただってわけじゃねえんだけどよ、なんか様子がおかしかったんだわ。遠くの方で人集りができてんだよ。んで近くの奴にありや何だと聞いても答えやがらねえ。この荷物受け取るときだって、俺以外、妙にうわの空で仕事も手間取っちゃった。こりゃあ、悪魔憑きか西方の疫病でも出たのかねえ」

最後の冗談は笑えなかった。どちらも村を潰しかねないことだ。特に後者の「西方の疫病」とは、その名の通り、西方で流行しつつある伝染病のことであり、最近ではひとつの都市が、都市として機能しなくなるほどの被害が出ている、と風の噂で聞いたことがある。その想像は、ダリオに暗い影を落とす。

「おい、その話」

詳しく聞かせてくれよ　と続けることは、できなかった。

まったくの突然に、鐘が鳴った。

日が昇りきったことを知らせる三練の鐘ではない。上流のほうから響いてきたし、音の大きさも、大鐘楼とは比較にならないほど小さい。せいぜい河港全体に響き渡った程度だろう。

それは、天航路の合図だった。

天航路、などといういかにも仰々しい感じだが、つまり「これから教会用の船が着港しますよ」という意味である。川のほうへ目を向けると、確かに上流ほうから、見るからに偉そうな裝飾が施された船がこちらに近づいてくるのが見える。

こちらに？

「あの船、こっちにくるんじゃないか」

ダリオと同じ疑問を、リカルドがつぶやいた。河港であるガヴリー港の発着所は、東西二カ所にわかれている。手前にあるここ西ガヴリー港と、少し進んだところにある東ガヴリー港。このふたつの差をひと言で表すなら「積み荷の価値」である。西側よりも高級な物を扱う東側　　と言っても、貴族がダンスを踊りながら荷物を運んでいるわけではない。いたって普通に、労働者が搬入を行っているため、ロツソの仕立て屋の徒弟として、東西どちらも利用する立場であるダリオには、その違いがいまいちよくわからない。

同門の職工曰く、「荷物を管理する者の身分が違う」ということらしい。そう言われてもまだピンとこないのは、やはりダリオには遠い世界の話なのだろう。

かまうものか、と思う。理解したところで、腹が一杯になるわけではないのだから。

とにかく、ガヴリー河港には東西二分という、確固としたヒエラルキーがある。

そして、フォネツアーレにおいて宗教とは、とてつもない影響力を持っている。

つまり、天航路の船は西側に着港することはない。本来なら奥へと操船していく様をただ口をあけて眺めるか、両手を合わせて祈る

かだ。

それなのに、天航路の船はそれが当然と言わんばかりに、こちらへと漕ぎ寄せている。

ざわめきが起ころ。

屋根のない平底船。近づくにつれて、船員が見えてくる。

まず、船の漕手が見えてくる。聖職者には見えないが、身なりがよく、乗員に飛沫をかけまいとする静かな櫂の動きは、普段から地位のある者を相手に船を漕いでいるのがよくわかる。

そして、その後ろには聖職者が二人。教会の者が好んで使う、リネン地の真っ白なダルマテイカ 広袖のチュニツク的一种 を着ている。服の構造と、それを着ている人物が年寄りということ、ダリオはこの二人の位階を司祭だとアタリをつける。見たことがない顔なので、二人とも郊外の者だということは間違いない。

そして、その二人の間に、もう一人いた。

女の子だった。

死角になって、いままで気づかなかったのだらう。ダリオたちの隣の船着場に停めるために、船を左舷に傾けた段階になって、始めて気がついた。

何だこいつは ダリオはそう思った。

小さい女の子だ。歳は十から十二と言ったところだらうか。他の二人とは違い、光沢のある、精緻な刺繍が施された白いローブを着ている。東方の素材が下地になっているのかもしれない。少なくとも、フォネツアーレではあまり使われない繊維が使われているのは確実だ。

その格好はダリオから見ても、はっきり言って、まったく似合っていないかった。同じ聖職者の格好にしたって、もっとマシなのがあったのではないか。ダリオは腹の中から虫に刺されたような感覚を憶える。

そして、年端もいかぬ女の子が、年離れた聖職者よりも豪華な衣服を着ていることに、その場にいる誰もが疑問を感じた。司教の娘か何かかもしれないが、少なくとも教会は、大衆の前で親族をそのような待遇で扱ったという事例は、今までにない。

様々な思惑が交錯するも、誰一人言葉を発しようとはしない、奇怪な空間。

そんな中で、女の子を乗せた船が棧橋の横についた。

まず、漕手が船から降りて、先頭の者から順に手を差し伸べる。

漕手をよく見ると、かわいそうなぐらい視線が泳いでいた。周囲の空気を感じ取って緊張しているのは明らかだ。残念ながら、どこを見渡しても救いの手はありそうにない。

対して、司祭と思しき聖職者は、毅然とした態度で差し出された手を握り、船から降りる。これだけの注目を集めながらも眉ひとつ動かさないのはさすがと言いたいところだが、ダリオにはそれが、周囲を強烈に意識してるが故のポーズにしか見えない。

そして女の子は、フォネツアールを見ていた。

見ているのは、青空にそびえ立つ大聖堂や大鐘楼だろうか。視線はやや上に。周囲の注目を気にしていないのではなく、気づいてすらいらない様子で、ひたむきに、どこまでも真剣に、水の都を見つめ続けている。

その姿は、思わず目を背けたくくなるような何かがあった。

実際に、ダリオは女の子から視線を逸らし　そして、気づいた。船と棧橋との距離が、大人一人分ぐらい開いていた。

別に、これは珍しいことでもなんでもない。少し足を伸ばせば落ちることはない。だが不注意な者は、足を滑らせて水へ落ちてしまうこともある。そうになったら最後、周囲の者から、「阿呆め」と、ずぶ濡れたマヌケを指さし笑うのだ。事実、ダリオはそんなシーンを今までに何度も見ている。

だからダリオは気にも留めなかったし、他の者に関しては、気づいていたかすらあやしい。

女の子の、どこか遠くを見ているような視線が、下へと移った。そう見えたが、違った。

女の子は、垂直に落ちていった。

今まで自分たちが棧橋に足をつけて降りていたことは実は間違いで、そのまま水中へ落ちるのが正しい船の降り方なのではないかと思ってしまうほどの、それはそれは見事な落ち様であった。目撃した全員の表情が凍りついたし、誰一人、笑うどころか声さえ上げることとはなかった。落ち方ひとつでここまで凄惨さが際立つことを、ダリオは始めて知った。

真つ先に反応したのは、やはり側近の三人だった。とくに聖職者の二名はそれまでの厳めしい態度から一変して、情けないぐらい狼狽している。疑問が確信に変わった。どういったカラクリかはわからないが、あの女の子は、その何倍も長生きしているジジイより、えらいのだ。

女の子はすぐに引つ張り上げられた。

ダリオは内心で安堵する。船着場付近の水深はたいしたことはないが、服の素材によっては見た目以上に水を吸い取ってしまう。リネンなどはまさにそうで、もしジジイのほうが落ちていたら、大の男が数人がかりで持ち上げなければならなかっただろう。

気管に水が入ってしまったのか、女の子は棧橋の上で、膝をついて何度も咳き込んでいる。

その表情は、濡れた前髪に隠れてうかがえない。

どこか人間離れた霧囲気を持った女の子の、その普通の反応に緊張しきっていた周囲の空気が弛緩した。ダリオは自分の口が開きっぱなしだったことに、いまさら気づく。

何かしなくては。

そう考えたのはおそらく、女の子はさぶ濡れで、側近の者はただ狼狽しているだけで、近くに自分の手に麻布があったからだ。ただでさえ、目立っている一団だ。濡れたまま街の中を歩き、好奇の目に晒される光景を想像する。それは、あんまりだと思った。

決めた後の行動は早かった。リカルドが声を出す間もなく、馬車に乗ったような勢いで隣の棧橋まで駆け寄る。濡れた女の子に麻布を渡そうとして、

「っ」

足が止まった。ダリオと女の子の間に、白い服を着た老爺が入ってきた。

「何か用かね」

先ほどまでの狼狽が嘘のような、まったくの無表情。その目には、確かな盲信の色があった。

盲信という言い方が悪いのであれば、決意や信念と言い換えてもいい。

なにせよ、ダリオに二の足を踏ませるには、十分な意がそこにはあった。

老爺の背後から、けほ、と女の子が大きくむせた。

「これ」

ダリオは立ち止まったまま、その場で麻布を見せつけた。正直言っただけは、女の子に対する気遣いよりも、自分に敵意がないことを相手に知らせる意味のほうが強かった。もっとはっきり言えば、ビビっていた

だから、頭の中で逃げ道を探した。

なにやっつてんだ、おれ。

見つけた。

見ず知らずの相手にここまでする必要はないんじゃないのか。首を動かさずに視線だけであたりを見れば、自分も注目を浴びていることが手に取るようにわかる。今になって、自分ほとんどもないことをしているんじゃないか、とさえ思えてくる。

そう考えているうちに、聖職者が麻布を手にとって、

「ありがとう。主はすべてを見ておられるよ」

そう言った。吐き気がするような台詞と、不気味とすら思えるうわべだけの笑顔だったが、唾を飲み込むことで顔に出すことを我慢

した。

やることはやった。さつさとこの場から離れよう。

最後に一目見ようと、ダリオは回れ右をしながら女の子の方に目を向ける。踵を返すはずの身体が、横向きのまま停止した。

目が合った。

夕焼けみたいな瞳が、驚きで見開いている。

その表情が、一瞬だけ歪んだ。

下唇を強く噛んで、

まるで、何かを我慢している顔。

いずれにせよそれは、本当に一瞬の出来事だった。遠目から見ている者には、表情に変化があったかすらわからなかっただろうし、近くにいる漕手も聖職者も、突然登場したダリオの動向に注目していた。

だから、その「感情」のようなものを見たのは、ダリオだけだった。

女の子の髪や顔からは、いまだに水の雫が滴っている。

その顔はもう、どこか遠くを見ているような、透明な表情。

無表情、ではない。

目を合わせているだけで、頭の中ではまったく別のことを考えている。そういう顔だ。奇妙な表現になってしまうが、女の子は、目を合わせながらにして目をそらしている。

立ち去らないダリオを怪訝に思いながら、老爺は受け取った麻布を細かくチエックし始めた。強く指で擦り、それを舐めて確認するほど徹底さだ。泥くさい味のはずだが、それを表情に出さないのはたいしたものである。

老爺はようやく害がないと判断し、女の子のほうへと歩み寄る。瞬間的に、自分が拭くべきかどうか逡巡する。結果として、肌どころか衣服にも触れないように、必要以上に畏まって、麻布を女の子の肩へかけた。

女の子はのろのろとした動作で、自分の髪を拭き始めた。

それを見たダリオは、自分でも知らぬうちに小さく笑っている。「行きましよう」

老爺が小声でそう言つと、女の子は迷いなく立ち上がつて、歩き始めた。老爺は慌てて、それよりも前に出て先導する。もう一人は、漕手に何事かをつぶやいてから、その後を追つ。

女の子が歩く度に、ぶちゅ、とびしょ濡れの靴から空気が抜ける音が聞こえた。

頭に麻布をかぶせたまま、振り返ることもなく、まるで逃げ水のように遠くなつていく。

その姿が消え去るのを待たずに、船着場はもとの喧騒を取り戻す。いましがた目撃したものについて、さまざまな憶測が飛び交う。

あの女の子は何者なのか。付き人は本当に教会の者だったのか。凶事の前兆なのではないか。

そんなに気になるなら、なぜ追いかけない。

ダリオは、そう思った。

老爺を追いかけて、直接尋ねればいいのだ。いや、後をつけるだけでもいい。少なくともこの場で気の知れた仲間と、勝手な妄想を語るよりかはるかに現実を知ることができるだろう。なぜそうしないのか。

恐いのだ。宗教という名の、自尊心を疑うことが。明日の平穩を侵すことが。

自らすすんで、藪の中に手を入れるのは、馬鹿のすることだ。

誰かが刈り取つた、藪のない道を歩くのは、心地がいい。

ダリオは、ため息にも似た息を大きく吐く。自分も、自分の仕事へと戻ることしよう。

「なあにやつてんだ、お前は」

馬鹿にした調子でリカルドが迎えてきたので、仏頂面で返してやる。

そこでふと、背後を振り返つた。

その視線の先は、先ほどまで女の子がいて、そして歩いて行つた

道だ。今は誰もおらず、ただ水の足跡だけが、陽光に反射して輝いてる。

それで、一体どうして振り返ったのか、合点がいった。女の子の、場違いな足音が聞こえなくなったのだ。

なんのことはない。ただそれだけ。

「ん？ なに見てんだ？」

リカルドが、ダリオと同じ方向に視線を向けた。ダリオはそれを見て、笑みを浮かべた。

「邪悪な笑みだった。」

「なんでもねえよ」

腕を伸ばして、リカルドの身体を突き飛ばした。

ひとたまりもなかった。

フォネツアーレの晴天に、本日二度目の水飛沫が上がる。

麻生地ひとつを「誤って川に落としてしまった」と報告したら、釈明の場もなく、頭を一発はり飛ばされた。

ただの平手ではない。人を装った熊の平手である。

そんなものを一発でも貰えばタダでは済まない。それを証拠に、ダリオはくるとわかっていてもその衝撃に耐えきれず、近くの壁に身体を打ちつけている。あれで仕立て屋の親方だと言うのだから、世の間違っている。

打ちつけた身体はなんともないが、叩かれた頭だけが、やけに熱を持っている。

気分も悪いし、めまいもする。

まったく、なんとという一日だ。今日は作業量が少なく、羽を伸ばせると思っていたのに。

ダリオは工房の二階にある自室に一人、固い毛布に包まりながら息を潜め、熱が引くのをじっと待っている。頭まで毛布をすっぽり

かぶるのは昔からの癖であり、そのまま寝てしまつこともある。昔、同い年の奴に息苦しくはないのか、と聞かれたことがあるが、別にそんなことはない。こうしていると、とても落ち着くのだ。

端から見ればそれは、拗ねた子供にしか見えない。

遠くから、鐘の音が聞こえてきた。

部屋の中からも聞こえるほどの大きさ。三練の鐘だ。一般的に、この鐘が鳴って次の四練の鐘が鳴るまでの間は、休憩時間とされている。職種を問わず激務とされる職人たちの大抵は、昼寝していることが多い。もちろん、それすら許されない者もいる。

殴られて寝込むのは、なにも初めてではない。

しかし、今回はなかなか熱が引いてくれない。

おそらくそのせいだろう、先ほどの奇異な少女のことばかりを考えているのは。

「なんだつてんだ」

憎々しげに、そうつぶやく。自分が抱いているこの正体不明の感情を、どう扱えばいいのか。

窮屈そうに、布団がもぞもぞと動いた。出ればいいのに。

例えば、恋慕。

それはない。今も昔も、そんなものを抱く余裕はない生活をしている。恋慕の情なんていうのは、流行りの叙情詩にあるように、生活に余裕がある貴族の道楽である。もし仮に、これが恋だの愛だのといったものならば、それは喜劇である。

例えば、同情。

それはない。確かに布を渡そうとした動機は、そうだったかもしれない。しかし今思い返して頭に浮かぶのは、立ち塞がったジジイに何もすることができなかつた、自分に対する苛立ちだ。そこに女の子への憐憫はない。そもそも、彼女の一体何を憐れめなのか。言葉も交わさない、あれだけの瞬間で、もし少女に同情する者がいるなら、そいつは救いがたいほどのアホである。

例えば、教義。

それはない。自分にとって宗教とは、遠い世界の話であり、永遠の隣人だ。神はいない、などと断言できる決意はない。しかしだからといって、神を肯定する信念も持ち合わせていない。自分にとって信仰とは、自分の意思とは無関係に、ただそこにあるものだ。例えば、好奇。

どうだろう。自分は先ほどの非現実的な出来事に、惹かれているのだろうか。

例えば、フォネツアーレに住むことになって半年が経った。それより以前の生活は、日常などという生温い言葉が立ち入ることがないほどの、凄惨な日々の連続であった。

何を間違っても、あの日に戻りたいとは思わない。だがしかし、日々の変化の乏しい今の徒弟の生活に、慣れてきたのも間違いない。慣れとはすなわち、退屈だ。

退屈は、人を殺す。

ただ単に、刺激が欲しいだけなのかもしれない。

その結論は、納得するには至らなかったが、胸のつかえが下りた気がした。同時に、腹の中に燃料が投げ込まれるのをダリオは感じた。

それは、小さな火種だ。

気づけば、頭の熱も気分の悪さも、嘘のようになくなっていった。

あるいは、本当に嘘だったのかもしれない。

馬鹿になろう、と思った。布団から転がり出て、部屋の片隅の木箱を開ける。その中には、衣服に麻袋に仕事道具、果ては干し肉さえ一緒に入っている始末だ。その上ぼろくて古い箱で、扱いに慣れていないと、飛び出している木片に刺さって痛い目を見る。箱の中身を引っかき回して、最低限の身支度を済ませた。

時間はあまりない。四練の鐘が鳴る前に、この工房に戻ってこなければ、今度は平手一発では済まされないだろう。数日は痛みと熱で寝込むことになるかと断言してもいい。ロツソの仕立て屋の親方は、人生の過程で容赦という言葉を投げ捨てている。

向かうは、都市中央の教会区だ。

藪の中に手を伸ばしてみよう。

ダリオは、自分よりもずっと歳を食った扉に手をかけた。

だって仕方ない、

ダリオ・カルツァは、まだ子供なのだから。

天使に会った日(2) (前書き)

> i33887 — 4303 <

ILLUSTRATION 一色恋

天使に会った日(2)

昇り続けていた太陽が、ようやく落ち始めようとしている。

作業が一段落ついた。『ロツソ』の仕立て屋親方のマツシュ・ブロスキは、誰が見ても樽にししか見えない木製のジョッキで酒を飲んでいた。

四十九という年齢からは考えられない長身と巨体。通常サイズのテーブルや椅子が、まるで子供用かと思えるほど小さく見える。とある貴族が、注文した衣服を大層気に入れてこれを仕立て者を呼んでみれば、まさか熊が出てくるとは夢にも思わなかっただろう。あ
のとき人死に出なかつたのは奇跡に近い。

マツシュが肩を回して鈍い音を鳴らすのとほぼ同時に、工房の奥にある倉庫の扉が開いた。

埃が漂う倉庫の奥からは、狐の毛皮が詰まった木箱を抱えた職工、
ジョシュア・チエスタが出てきた。木箱の横から顔だけをのぞかせ
て、小さな笑みを浮かべる。

「親方、終わつたんですか？」

ジョシュアは普段、敬語を使うような男ではないが、雇い主であるマツシュは例外である。

「おう。鐘鳴つてんだ、それ運んだらお前も休んどけ」

「あれ、鐘鳴つてたんですか。気づかなかつたな」

にたにたと笑うその表情に、マツシュはふん、と鼻を鳴らす。

この工房内で、大鐘楼の刻限の鐘が聞こえない場所などあるもの
か。おおかた、鐘が鳴つても作業を止めなかつた自分に合わせたの
だろう。

腕の立つ職人であろうと、三練の鐘が鳴った途端に仕事を放り投
げる者は少なくない。だが、マツシュ・ブロスキにはそんな器用な

ことはできない。自分が納得いくまで作業を進めないと身体を休める気にならないし、そうしなければ完成の質は間違いなく落ちると思っっている。ことによっては、仕立てる気すら失せてしまう。そうして一度は受けた依頼を、蹴っってしまうこともある。

それでも依頼が絶えないあたりが、彼の腕のよさを雄弁に物語っている。過去に、さる名家の貴族から、帝都への誘いがあつたという噂もあるが、真相は定かではない。マツシユは数少ない弟子が相手でも、自らの過去を語ることはない。

「でも親方、この前大口のが終わったばっかじゃないすか。今回のよく受けましたね」

ジョシユアにしてみればそれは世話話のつもりだったが、墓穴だった。赤ん坊が見たら一発で泣き叫びそうな眼光でジョシユアをにらみつけて、

「ああ？ 馬鹿野郎、仕立て屋が服仕立てないでなにすってんだオイ」

すぐに、自分の掘った穴が想像以上に深いことに気づいたジョシユアは、逃げるように、抱えた箱を盾に自分の顔を引っ込め、その表情を隠してから、

「いや、だから、親方はすげえ仕立て屋だなあって意味で言ったんですよ」

ジョシユアは言うだけ言って、早足に作業部屋へ逃げ込んだ。この熊の如き男を相手にここまで冷静に対処できるのは、この工房の門を叩いた瞬間から始まった、長年の付き合いのおかげだ。弟分のダリオ・カルツァであつたら、こうはいかないだろう。

そんな、ひょうひょうとした背中にマツシユは無遠慮な舌打ちを向けてから、酒を一気にあおる。獣が吠えたような唸り声を上げるその姿からは、想像できないどころか冗談にすら聞こえるが、マツシユは酒があまり好きなほうではない。

かと言って、年に一度は必ず死者を出している井戸水を飲む気にはなれない。二十年ほど前の話だが、鼠の死骸が知らず井戸に入っ

てしまい、見るも無惨な被害を出したことがある。思えば、あのと
きからだったか。井戸の水をまったく口にしなくなつたのは。

ある程度の財がある者は、酒を飲む。「綺麗な水」というのは、
下手な酒よりもずっと高い。対して麦酒や搾りきつた果物に水を含
ませてもう一度搾汁するワインは格段に安い。この時代、一般的な
飲料と言えば酒なのだ。

「そつえば親方。ダリオの奴、どっか行つたんですか？」

作業場から戻ってきたジョシユアが、唐突にそんなことを言つて
きた。先のことがまだ尾を引いているマツシユは、すぐには答える
ことはなかつた。やがて振り向きもせず、

「みてえだな」

と返した。その背後で、ジョシユアがしてやったりという顔をし
ていることには、どうやら気づきそうにない。

「珍しいこともあるもんですね。あいつが親方に絞られてすぐに出
かけるのは。いつもは上掛けに丸まって腐つてるつのに」

マツシユはその言葉を一笑し、

「ありやあ、ただのポーズだ」

その意味を掴みかねたジョシユアは、首を傾げる。マツシユは相
も変わらず背を向けたままで、言葉が続かないと見るや否や、非常
に面倒臭そうな表情を作る。見るからに硬そうな自身の頭皮をバリ
バリと搔くと、頭垢が粉雪のように床に落ちる。

「お前が徒弟の時分、オレに怒鳴られたあとは毎回捻くれてたのか
？」

「まあ、違いますね」

素直に反省したこともあれば、あまりの理不尽さに不平を抱いた
こともある。ときには、殴られようがまったく別のことを考えてい
たこともあった。いや。むしろ、怒鳴られるだけで済んだ記憶
がほとんどないのだが。ひとまず今は、殴られた痛みの印象が色濃
く残っている、ということにしておこう。

「ダリオの奴もそうだろうよ。ちつとばかり前だが、飽きもしねえ

で丸まってると思ったら、笑ってやがったときもある。だからアレは、ただの習慣みてえなもんだ」

ジョシユアは感心したように頷いてみせたが、すぐに別の疑問が浮かんできた。

「じゃあ、なんで今回はいつもと違うんですかね？」

「知るかそんなもん」

ただのひと言で一蹴されてしまった。潮時だろう。

ジョシユアが立ち去る気配を感じて、マツシユは太くて長い息を吐く。

扉が閉まる音を最後に、工房は静寂に包まれた。

一人になったマツシユはしばらくの間、らしくもなく酒をちびちびと飲んだり、鼻毛を素手で抜いたりしていた。何かが気になってくるのだが、どうにもそれが何なのかわからない。答えはわかっているのに、問題自体がわからない。そんな様子だ。

やがて肩に片手を置いて、首をぐるぐると回し始めた。

間もなくして、首が止まる。

その視線の先は、工房の出入口。年季を感じさせる、木製の門口だ。いくら直しても、閉まるときに軋んだ音を出してしまうのだが、不思議と取り替えようと思ったことは一度もない。

ぼんやりとした目つきで眺めていると、ふと、いましがた聞いた言葉が、頭をよぎった。

「じゃあ、なんで今回はいつもと違うんですかね？」

視線はそのまま、つぶやいた。

「ほっとけ。ガキじゃあるめえし」

少しだけさかのぼる。ダリオ・カルツァは工房を飛び出して労働者の橋を渡ろうとしていた。

はじめは全速力で走っていたものの、今ではもう急ぎ足になって

いる。それというのも、教会区に到着したその後の検討が、まったくついていないからだ。祝典が行われる祝祭日ならともかく、平日に一般人が入られる施設など限られている。果たして、外でうろついているだけで、例の女の子が見つかるかどうか。

忍び込むぐらいはしてやるうか。

もしバレたとしても、熱心な信仰者でも演じてやれば、誤魔化せる気がする。

そんなことを考えていると、足下がゆるやかな傾斜を感じ取る。

労働者の橋とは南島にある職人区と、中央島にある商業区や教会区を結ぶ橋のうちのひとつであり、石造のアーチ橋のことである。渡るぶんには何の変哲もないただの石橋だが、側面にはその名の通り、働く労働者たちを描いた彫刻が荘厳なまでに施されている。

橋そのものは大規模なものではないが、こういった意匠を凝らした橋というのは、自然と人が集まる。

船を漕いでいる露天商。服というよりは布切れを売りつけている古着屋。チップをねだる大道芸人の側には看板があり、そこには飛脚の意味を持つ記号が彫られている。どうやら旅芸人らしく、各地を回るついでに配達も請け負っているようだ。まあ、こんな場所ので芸をしている者に、物を預けてまともに届くかは、極めてあやしい。

そんな喧騒の中を、足早に歩くダリオの視界の外から突然、影が飛び出してきた。あまりの唐突さに、ほとんど無意識に足を止めてしまう。

「若いのに、そんなに急ぐと転んでしまうぞ」

影は爺だった。目の前の古着屋でも売り物にはしないような、一体どれだけ着古せばそうなるのかというボロ布を身にまとっているやせ細ったその身体は相当な高齢に見えるが、不思議なことに背筋は曲がっていない。笑みを浮かべているその顔面は皺だらけだ。

見覚えのある爺だった。

と言うよりも、一方的に知っていた。有名人だ。数年ほど前から、

貧困区を中心とした衛生の悪い場所に現れては掃除をしていく、名称不明の老人。ある者が好奇心に尋ねたところ、フォネツアーレが好きという理由だけで、ゴミどころか打ち捨てられた糞尿だって素手で掴む、文字通りのクソ爺。

遠目でなら何度か見かけることもあったが、こうして面と向かうのは初めてだ。

「急いで転べば傷ができる。その傷を手当てしようと思えば、急いでいたはずが余計に時間を食ってしまうというわけだ。何事も、好い加減でなければいかんよ」

ダリオの驚きなど知らぬ顔で、老いぼれは滔々と訓示を垂れ終えると、どこか気味の悪い笑いをより一層深めてから、血管がはつきりと浮いている両腕を差し出した。

手の平を相手に向けるその姿勢は、誰が見てもわかる「頂戴」の表現だ。

物乞いかよ。

ダリオは隠そうともせず、むしろ見せつけるように嫌悪の表情を作った。付き合ってもらえるかとばかりに、クソ爺の脇を早足で通り抜ける。

「おお、若いの。待たれよ」

爺は両の手をかざしたまま、後をついてくる。いったいその細足をどう動かせばそんな軽快な動きができるのか。糞尿を平気で触るその手に捕まりたくない一心から、身体を傾かせながら振り切ろうとする。

それにしても　とダリオは思う。こんな場所で、しかも自分に物乞いとは。見た目通りにボケているとしか言いようがない。職人区から労働者の橋を使って歩く、自分のような少年は、九分九厘で徒弟だ。徒弟とは住み込みで働き、雑用のかたわらに専門の技術を見習う者であり、基本的に給金というものがない。つまり、徒弟に物乞いなど、成功する見込みはないに等しい。馬車馬に聖書を読み聞かせるようなものだ。

「待たれよ、待たれよ」

背中越しからしつこく懇願するその声色に、苛立ちを憶える。自分に向けられる周囲の好奇心な視線が目立ちはじめると、さすがに我慢も限界だった。

一発脅かせば諦めるだろう。

腹に力を入れる。こういうことは、覚悟を決める必要があった。振り向いた。

切願していたはずの爺の顔が、相も変わらず笑っていて、一発でその気が失せた。

ため息を出すつもりで息を吸ったのに。思わず、

「あんだ、ほんとに物乞いか？」

言っつてすぐに後悔した。こんなクソ爺を相手にしてどうする。

爺は、思いも寄らないことが起こったとばかりに、目を丸くしていた。

そしていきなり、払えば簡単に振りほどけそうな力で、右腕を掴まれた。突然すぎて反応できなかった。

「どうしてそう思った？」

「は？」

「どうしてわしが乞食ではないと、そう思ったんじや？」

「いや、そりゃ」

どうしてもこうしてもあるものか。確かに、出会い頭にへらへらと笑う物乞いはいる。しかし、立ち去ろうとする者に縋りつく物乞いが、笑みを浮かべているなんていうのは、見たこともなければ聞いたこともない。がむしゃらに乞い、必死にしがみつかなければおかしいのだ。だって、自身の生命が懸かっているのだから。とダリオは思ったのだが、それを言葉で説明するのは存外に難しかったし、何より面倒で仕方なかった。自分は、他人に語って聞かせるような徳など、持ち合わせてはいない。

「物乞いが笑ってるのは、おかしいだろ」

結局、ダリオはそのひと言で片付けた。

その答えで得心がいったのか、あるいは呆れたのか。とにかく爺は、ほんの少しだけ考える素振りを見せると、ダリオの腕を掴んでいた手を離して、笑いながらひとつ頷いた。

「なるほどな。いや、思わぬ勉強になった。ふむ。礼と言ってはなんだが、わしからも一席ぶつてやるう。そうじゃな」

いらねえよ、とダリオは思ったが、口を挟まずに老いばれの言葉を待った。そうさせたのは、クソ爺の笑いの内に、真面目な顔を見た気がしたからだ。

「ぬし、この橋の名を知っているか？」

いきなりすぎてすぐに答えが出てこなかった。いつも使っている橋なのに。

「、労働者の橋」

「そう、労働者の橋じゃ。ぬしはこの橋の由来を知っているか？」

「いや、」

「この橋の　というよりも、この街の交通路のほとんどは、教会が計画したものでな。ちよっと目を凝らして見ればわかるが、建造物には彫刻や絵画などが描かれていることが多い。これはあまり知られてはおらんが、そのひとつひとつにちゃんとした意味が込められているんじゃない。　こういったうんちくは、若いぬしには退屈かな？」

「、いや。別に」

爺は笑う。

「この橋にも、もちろん意味がある。橋の両側面に彫られるは、彫刻職人たちの師弟相承の完全相伝が生み出した卓越した技能の一片。ぬしはこれを、なんと見る？」

話上手な爺だった。ダリオは先ほどまで気になって仕方なかった周囲の視線が、今ではまったく気にならなくなっている。実に真面目に考えて、実に正直に答えた。

「労働者は、踏まれる地位にある？」

爺はその答えを聞いて、堪えきれないといった感じで嘖き出した。

眉根を寄せるダリオなど気にもとめず、ひとつきり笑ってから、

「いや、すまん。あまりにも捻くれた答えだったもんでな。しかしまあ、うむ。いいセンいっとるな」

爺はごほん、と一度咳払いして場を直す。

「複数の島で形成されているここフォネツアーレは、橋があつてこそ成り立つもの。つまり、橋とは労働者そのものを指している。いかに身分が高かろうと、その下に道がなければ歩けもしない。この橋には、そういう意味が込められておる」

いかにも教会が好きそうな設定だ。ダリオは、顔にも言葉にも正直にそれを出す。

「ずいぶんとつまんねえ意味をこめてんだな。労働者だって、好きで踏まれてるわけじゃねえだろ」

「そうじゃな。わしもそう思う。この橋に込められた意味は、踏む立場の者の言葉でしかない」

爺のその言葉は、ダリオにとって少し驚きだった。それが表情に出たのか、爺は顔を突き出してきて、

「おおっ？ なんじゃその顔は。わしは別に、熱心な信徒というわけではないのでな。思ったことを言ったまですよ。　　だがな、」

爺はそこで言葉をためた。それまで浮かべていた笑みがふつと消えて、

「例え踏む者の言葉でしなくても、踏まれる者にとって救いになることもある。持って生まれたものというのは、残念ながら確かにある。そして、それが変えようのないものだということも、さして珍しいことではないのだ。ぬしが言うように、お偉い方の勝手な自己満足にすぎんかもしれん。だがな、『つまらん』で片付けるよりは、よっぽど健全とは思わんか？」

ダリオは言葉に詰まった。

クソ爺の言葉に納得したわけではない。むしろ、感じているのは強い反感だ。

しかし、もっともだと思ってしまうた。

言い返すはずの言葉が、ひとつも見つからないのだ。
だから、

「結局、教会を肯定してんじゃねえか」

爺はやはり笑って、

「ぬしがひとつの可能性を指摘し、わしもまた別の可能性を言っただけのことよ。　ところでな、さつきから思ってたんだが、」

「？」

「ぬし、急いでいるのではなかったのか？　神がもたらす幸運とは、人にとっては目の前を一瞬で走り抜けてしまうようなものな。例えばほれ、死に損ないの老いばれなどに構っていると、掴めるものも掴めなくなってしまうかもしれないぞ」

当然、ダリオは狐につままれたような顔になった。

爺は、それが見たかったと言わんばかりに、にたりと笑った。

ダリオは今度こそ、ため息をつくしかなかった。　変な爺だ。
自分がこれまで見た中でも、飛びきりに、頭のネジが飛んだクソ爺である。

「あんたが言うなよ」

悪態ではなく、愛想のない声色でそう言い切って、ダリオは背を向けた。それは、クソ爺の相手など、もうしてられるかという意思表示だ。背中に口はないのだから。

爺はその意を汲んだのか、それとも単に飽きたのか、もうダリオを追うことはなかった。からからと笑いながら、ダリオとは反対方向の職人区へと、不規則な歩行で進んでいく。

ダリオは歩きながら何度も躊躇ったが、ついには我慢できなくなつて背後を振り返る。目の前で見ても小さかった爺の姿は、今ではもう豆粒ほどになっていた。

変な爺だ。

繰り返し思うダリオの顔には、薄い笑みが貼りついていて。それは、つい先ほどクソ爺が浮かべていたものに、とてもよく似た笑みだった。

そのとき、突然、ダリオは思い出した。

クソ爺のあの汚い手で、腕を掴まれたことを。

だからどうしたという話であるが、本人からすれば、一度気になっ
てしまっただらもうどうしようもなかった。ダリオはおっかなびっ
くり、掴まれた右腕を自分の鼻へもっていった。

近づけるまで止めていた鼻の呼吸を、一息に吸い込んだ。

鼻が曲がりそうなほど臭かった。

職人区から労働者の橋を渡り、商業区のメインストリートを真っ
直ぐ進むと、値段は高いが信頼の厚い、あまり大衆的ではないパン
屋がある。そのパン屋を目印に右折し、少し先を進めば、驚くほど
視界が広がる場所へ出る。

その場所を「マルチエロ広場」という。それは都市の中心部にあ
る大広場のことであり、その広さは馬車馬でもバテそうなほど広い。
大聖堂や大鐘楼を中心とした教会関係の建物がずらりと扇状に広場
を囲んでいることから、マルチエロ広場一帯は「教会区」と呼ばれ
ている。大広場を出てすぐには、都市行政の宮殿も建っているが、
その規模と景観の差は火を見るよりも明らかだ。都市運営を取り仕
切っているのは貴族たちの評議会だが、フォネツアーレに暮らす民
衆はそういう意識が薄い。なぜかと言われればそれは、政治よりも
宗教のほうがよっぽど身近で潜在的だからだ。

さておき、大聖堂の話しよう。

正式名称を「フォネツアーレ大聖堂」というその大規模な一堂は、
着工自体は百年以上前から行われており、外見上は完成しているか
のように見えるが、その実いまだ未完成である。しかし、未完成と
いっても聖堂としての機能はすでに完成しており、祝典の日などは
聖職者たちが集まることもある。それでもなお増改築を繰り返す様
に、いったいどれだけ大きくすれば気が済むのかとダリオは思うの

だが、その一方で名匠と呼ばれる工匠たちの技術の集積を目の当たりすることは、何度見ても心が躍るのを隠しようがない。大聖堂を初めて見たときなど、首が痛くなるまで見上げたものだ。

そして今、ダリオ・カルツァは大聖堂の端にある、礼拝堂の扉の前をうろつろつとしていた。

その姿は、紛うことなき不審者そのものだ。

思えば、ここに到着したときが絶好の瞬間だったのだ。躊躇なく扉に手をかけて中に入っていれば、絶対にうまくいっていたはずである。なんていうのは後の祭であり、現実としてダリオは、忍び込むことにビビってしまい、何度も周囲に視線をさまよわせて、遠くにいた貴婦人と目が合った時点で、忍び込む度胸は完全に砕けた。

そうして砕けた欠片を拾い集めて、現在。

最終確認のつもりで、もう一度だけ周囲に目を配る。

一番近くにいる人影は、自分の小指ぐらいに見えるほど離れていて、しかもこちらに気づいている様子はない。大丈夫だ。むしろこうして尻込みしているほうが問題で、さっさとあの扉の中に入ってしまったほうがいい。

散々ぐずついていたせいか、思い切ってしまうえば開き直るのは簡単だった。ダリオは自然な表情を作って、自然な足取りで、当たり前のように、

扉が開いた。

ダリオが開けたのでない。内側から扉が開いたのだ。ダリオもまさか中に人がいるとは予想もしておらず、思わず上半身が跳ね上がる。内心ではパニックになりすぎて、逃げようという思考にすら至らない。半ば放心状態。

そんな意識の片隅で見た人影は、どこかで見た立ち姿だった。

人影は、扉から一歩前に出ると、自分の身なりを確認したり、背

後の扉を気にする様子を見せる。それは、物忘れがないかを確認しているように見えた。どうやらダリオの存在にはまだ気づいていないようで、その仕草はなんとも隙だらけだった。

腕に、どこかで見覚えがある麻布がかけられていた。

人影は、先ほどの女の子だった。

先ほどとは服装が変わっていた。それでも、どこか遠くの世界を見ているかのようなその瞳を、見間違うはずもない。

ようやく、物を考えられる程度には回復したダリオの判断力が、先の女の子と自覚すると、なによりもまずその「変わった服装」に目がいった。

白を基調としたドレスは、あくまで法衣を意識しているが、その一方で女性らしいデザインを指摘している。その最たるが地についてしまうほど長さのある袖だ。貴族の間では定番になっている意匠である。しかし、女の子がそれを嫌がったのか、袖が短くなるように結んである。それが女の子自身の意志だと思ったのは、結び目が素人がやったとしか思えないほど、乱暴だったからだ。全面的に見れば、布地は呆れるほど贅沢なものをふんだんに使っているのが見て取れる。ケープや服の縁に装飾されている黄金色は、どう見ても純金を線状にしたものだ。

その格好は、まさに歩く金山の如きだが、気取ったところがまるでないのも特徴的だった。普段様々な生地を目にしているダリオだからそれが金山とわかるものの、一般人には銅山程度にしか見えないただろう。

もっとはつきりと言ってしまえば、ダリオは一人の職人として、その衣服に心を動かされた。それは感銘と羨望と嫉妬と不敵が攪拌したような感情だった。ダリオには、今の自分の気持ちを表現する方法がわからない。この感情を何と言い、そして、どうすればいいのか。

なんてことを考えていたら、女の子がこちらを向いた。お互いの距離は数歩先なのだから、今まで気づかなかったほうが不思議

なぐらいだ。

女の子は妙な動きをした。一瞬だけ目を見開いて、それから一度顔をあらぬ方向へと逸らしてから、改めてダリオのほうを向いて、じっと見つめる。

ダリオにはそれが、おかしくて仕方なかった。今やった妙な動きは、隙だらけの姿を見られて照れたに違いない。残念ながら衣服に目を奪われていて、女の子がどんな表情をしていたのかはわからないのだけど。もっとちゃんと見るべきだった。

女の子は、ほんの少しだけ首をかしげてから、躊躇いのない歩調で近づいてきた。

おかしい気持ちが一瞬で吹っ飛んで、女の子と一緒に緊張が襲ってきた。どうしよう。

決断すべき間もなく、女の子はダリオの目の前で立ち止まり。何か言いたげな視線を据えて、自分より背の高いダリオを、無言で見上げている。

「
無言で、見上げている。」

いや、何か言えよ。

ダリオはことさらに、女の子の顔を見る。やはり何か言いたそうな表情。なのに、何も言っていない。まるで近所の子供たちが遊んでいるのを、遠くから盗み見ているような表情。自分から寄ってきたくせに、一向に喋る気配のない女の子に、ダリオはついに我慢できなくなつて、

「
なんだよ」

女の子は、そのぶっきらぼうな言葉に、ほんの少しだけ安心したような顔をした。

「あの、これ」

そう言いながら、ダリオの前に差し出したのは、ガヴリー河港で渡した麻布だ。

「 さつきは、ありがとう 」

初めて耳にする女の子の声は、意外にも朗らかな印象を受ける声色だった。少し不器用な喋り方も、人懐こく耳に響く。

「 ああ、いや、 」

その麻布はもう商品にはならないし、お前にやる。 という意味のことを、ダリオは言おうと思ったのだが、言葉が詰まった。女の子が着ている衣服と比べたら、目の前にある麻布など清掃用の雑巾と同義だ。この雑巾はお前にやる、と言われて、女の子ははたして喜ぶだろうか。そして、そんなことを口にしてしまったら、自分が恥をかくのではないか。

「 どうも 」

結果、ダリオは苦々しい表情を顔面に貼りつけて、差し出された麻布を受け取った。女の子は、そんなダリオは不思議そうな顔で眺めている。

まあ、自分で仕立てて、労働者や古着屋相手に売りつければ小遣いにはなるだろう。もっとも親方に見つかれば、大目玉を食らうだけでは済まないが。

さて。

どうしたものか、とダリオは考える。ここで「じゃあ、おれはこれだ」とこの場を立ち去るのが自然な気がするが、目の前の女の子を探す目的でここに来たのだ。これで別れるというのは、なんとうか、もったいない気がする。

頭の中で必死に言葉を探していると、ふと女の子が出てきた礼拝堂の扉が視界に入って、

「 聖職者なのか？ 」

そんなわけあるか、と即座に自分で自分の台詞を否定した。女性
は聖職者にはなれない。

「 違う 」

当然、女の子は首を振って否定した。

ダリオはなんとか会話を続けようと、次の言葉を探す。

「名前は？」

女の子は、少しだけ考える素振りを見せてから、

「クレメンティナ・リサリーティ。長いから、みんなからはティナ、って呼ばれてた」

みんなって誰だよ。

そう思ったが、今はあまり突っ込んだことを質問するべきではないと思った。それに、名前を聞いて、自分が名乗らないのは不公平だ。

「ティナか。おれはダリオ・カルツァ、仕立て屋職人。徒弟だけだな」

「仕立て屋職人？」

先ほどから思っていたことだが、このティナという女の子の喋りはどうにも調子がおかしい。明瞭な発音なのに、言葉を短く切って喋るのだ。まるで、もつと言いたいことがあるのに、強い意志でそれをねじ切ってるように感じる。少なくとも、そんな勝手な想像してしまうぐらいの違和感があった。

まあ、こういう喋り方と言われれば、そうなのかもしれない。

「ああ。布を裁って服を仕立てる職人だ」

「すごい」

漏れるように吐き出したその言葉の通りに、ティナは道端で綺麗な石を見つけたような目で、ダリオを見つめる。その視線が、ダリオにはむず痒い。

そして、再び沈黙。

むず痒さがそのまま居心地の悪さになって、今度こそ、なにも言葉が出てこなかった。頭の中には、「お前は誰だ」という純粋な疑問しか出てこない。そうしているうちに、ティナが強い目つきでダリオを見返してきた。

決意がこもった目だった。

「あの」

「？」

「お願いが、あるんだけど」

「なんだよ」

ダリオは、突然の言葉に瞬間的に驚いたが、それを顔には出さなかった。ティナのほうから頼ってくれるというなら、渡りに船だ。

しかし、なかなか言葉が返ってこなかった。よく見ると、ティナの視線が何度も上下している。それはまるで、目の中で何度も転んで、何度も起き上がっているように見える。

瞳の中のティナが、ひときわ派手に転んで、飛び出すように起き上がった。

「わたし、この街にきたの、はじめてなの」

この時代、男が女をガイドするということは、それなりの意味を持つ。

その発端は、詩人が語る代表作のひとつになっている、騎士が貴婦人に愛の作法を教える物語にある。その内容は多種多様に存在するが、大抵の騎士は貴婦人を、狩猟場や美しく神聖な場所へ連れていき、人目を離れて二人きりになって、自らの情愛を説くのだ。

身も蓋もない言い方をすれば、かっこつけて勇猛な狩猟なんかを淑女に見せつけて、雰囲気のある場所へ連れて行って口説いちまえ、ということになる。

これが例えば、女のほうから案内をしてくれと頼もうものなら、それもう完全に男を誘っているのと同じ意味である。ダリオは据え膳とはなにかを海よりも深く考えた。好物はさつさと食べてしまう方なのだが、それは許されるのだろうか。

なんていうのは、教会区を出てすぐに、ろくでもない妄想だったということを確認した。

女の子 ティナは、ダリオより三步分ほど後ろからついてきており、さつきからしきりに首を動かしている。目に映るものすべてが珍しいといった感じで、どうしても気になるものを発見すると、我慢ができなくなってダリオに聞いてくる。

「あれは？」

「水車小屋。あれは 製粉所のやつだったかな。街中に水路を引いてるから、ここじゃ水車は珍しいもんじゃない。とくに職人区には、そこらじゅうにある」

ティナは、目を輝かせながら感心している。さつきからこんな調子だ。回る水車が面白いのか、その目はおもちゃを見る子供そのものだ。

これなら他人から見ても兄妹か、子供同士がじゃれ合ってるようにしか見えないだろう。それでもダリオは顔見知りに見られるのが嫌で、今も普段は使わない通りをあえて選んでいる。

ダリオは深く息を吐いた。自分でも、これがため息なのか安堵なのかかわからない。

これからどうしたものか。

フォネツアーレを案内して、と言われても、自分も半年ほどしか住んでいないので、口語でうまく説明する自信はない。かと言って、すべてを歩いて見て回ろうとすればとんでもなく時間がかかる。

ダリオの背後から、小走りする足音が聞こえてきた。色々なものに目を奪われて立ち止まっているので、こっしないとどんどん離されてしまうのだ。

ダリオは、ティナに気づかれないうちに歩く速度を緩めた。その顔には薄い笑み。

「あれは？」

何度目かになる短い疑問。

まず、ティナの顔を見てその視線を辿り、目的のものを確認する。

「あれは 靴屋の看板。って、」

周囲をよく見れば、靴屋通りに入っていた。そこはその名の通り、靴屋ばかりがある通りだ。使う素材や用途の数の分だけ、その職人が存在するため、ひとつの通りに同種の商店がひとまとめに並んでいることは、フォネツアーレに限らずよくある風景だ。

「ここは靴屋通りだな。ほら、こっやつて一カ所に集めれば、独り

占めができないだろ」

ダリオはあえて皮肉っぽく言うと、ティナは少しだけおかしそうな笑みを浮かべた。

こうやって何度か顔を突き合わせている間に、ダリオはティナの微妙な表情の変化がわかるようになってきた。そしてそれに気づけば、ティナの表情はコロコロとよく変わっているのがよくわかった。初めて見たときのあの透明な印象は、ダリオの中にはもうほとんどない。

ふと、路地の一角が目についた。

この路地を少し歩けば、開けた土地に出る。そこには井戸がある。なにしろ大きい都市だ、都市のそこらじゅうに井戸が設置されている。地層の構造上、フォネツアーレではまともな地下水を得るのが難しいため、雨水を利用したり、川の上流から取水するといった工夫がされている。資源不足を技術力で補うあたり、フォネツアーレらしいとダリオは思う。

井戸のことを考えた途端、ダリオは喉の渴きを覚えた。そういえば、ずいぶん前から何も飲んでいない。

「ちよつといいか」

「？」

「いや、喉が渴いて」

そう言っつて、ダリオは路地へと折れる。ティナは当たり前のようにその後が続く。

井戸の前までいくと、ダリオは慣れた手つきで水を汲んで、この誰が口にしたのかもわからない薄汚れた木桶の縁に、平気で口をつけて喉を潤す。

視界の隅で、ティナがじつところらを見ていた。

「。飲むか？」

素っ頓狂なことを聞いてしまった。

そう思ったのだが、意外なことにティナは「うん」と頷いて、細い腕を伸ばしてきた。

変な奴だ。

ダリオはもう一度、水を汲み上げる。そのままだとティナには少し重いと思ったので、半分ほど井戸に落としてから、木桶を差し出した。ティナは両手でそれを受け取って、木桶を持ち上げて飲み始めた。

何度も喉を上下させ、縁から口を離すと、ほう、と息を漏らす。いい飲みっぷりだった。

面白い奴だ。

そのとき、突然に屋根の隙間から、陽光が差し込んできた。

ダリオが思わず目を逸らしたその先は井戸の底であり、臭いを嗅ぐと鼻がすーっとするような冷たさが伝わってくる。目をこらして見ると、水面がゆらゆらと揺れていた。いつもはどんなに見下ろしても、真っ暗な闇しか見えないのに。

見下ろしても。

思いついた。

ダリオはティナに向き直る。思わずその手を引こうとしたが、すんでのところでは羞恥心が生まれて、手の代わりに木桶を掴んで投げ捨てた。

「行こう。いい場所があった」

あまりの突然のことに、ティナは状況を飲み込めない。それでもダリオはどんどん先を歩いてしまう。ティナは置いて行かれたくないという一心で、慌ててその後についていく。

路地を抜けて靴屋通りに戻ってきた。そこでダリオが振り返ったので、

「いい場所？ どこ行くの？」

ダリオは答える。

「街が見える場所さ」

ダリオは今、友達に自慢のおもちゃを見せつけるかのような、そんな顔をしている。

水の都と呼ばれるだけあって、フォネツアーレには港が複数存在する。貿易港、河港、軍港、造船所、計四力所。そのため、造船職人は建築関係の職人の中でも、一二を争うほどギルドとしての規模が大きい。その造船技術の高さは、言うまでもなく一流だ。

そして、フォネツアーレの住民が「港」とひと言で言えばそれはガヴリー河港のことではなく、都市の東にあるフォネツアーレ港のことを指す。ガヴリー河港は自国内の農作物などを運搬することがほとんどだが、フォネツアーレ港は貿易港であり、その相手は村ではなく国だ。輸入もすれば輸出もする。港としての規模も、河港とは比較にならないほど大きい。

広い通りに出ると、西日がダリオたちを迎えた。

その建物は石造りで、近づく塩と布の臭いがする。近くにある建物と比べれば少し小さいが、それでも家屋と比べるとずいぶん大きい。三練の時間帯のせいか、周囲には人の気配を感じない。もつとも、どこかで眠りこけてる奴ぐらいはいらるだろうが。

「倉庫？」

ティナはその建物を見上げて、つぶやく。ダリオは頷いて、「輸入した素材なんかを置く倉庫。東方の絹とかな。でも海が近いし、あまり保存しておくものじゃないからあんま使われてない。」

いや、そっちじゃない」

ダリオは、倉庫の中へ入ろうとしたティナを呼び止める。ティナは「ここじゃないの？」という顔をしている。

「中に入ってもし見つかつたら、盗人と間違われて捕まっちゃうよ。こっちだ」

そう言っただリオは、倉庫と倉庫の間、せいぜい一人分しかない狭い小路の中へ入っていく。日差しが一切当たっていないため、少し肌寒い。ダリオはそのまま通り抜けるかと思えば、路地のちょうど真ん中あたりで足を止めて、壁に手をあてた。

壁には出っ張りができていて、それが屋根まで続いていた。

屋根の構造は片流れで、ダリオたちがいるのは軒側なのはずいぶん高く見える。つまり、屋根の傾斜が緩かなのだ。その上に人が乗っても問題ないぐらいに。

「これ？」

「そう、この上。で、これは、多分この倉庫を建てるときに使った梯子」

ダリオはそこでいきなり、しまった、という顔をした。

「っ。そうだった。結構高いんだよねこれ。登れるか？」

ティナはその言葉を聞いて、梯子の高さを確かめるように見上げた。確かに高い。途中で足を滑らせようものなら、怪我では済まないかもしれない。しかし、

「平気」

ティナはそう言い切って、一步前に出た。身体が密着しそうになって、ダリオは慌てて、よろめきながら後ろへ下がる。ティナはダリオとの距離なんて気にする様子もなく、梯子に手をかけて登り始めた。

目の前を流れたティナの長い髪から、今まで嗅いだことのない透明な匂いがした。

胸の雲がすつと晴れるようなその匂いは、ダリオをひどく落ち着かない気分させた。

「ったく。先に行くなよ」

目のやり場に困るのだから。

ダリオは己の胸騒ぎを振り払うように、ティナの後に続く。銀貨でも落ちてねえかなあ、なんて考えて、真下の地面を凝視しながら、そうしているうちに、

「わあっ」

ティナが屋根の上についたのだらう。本人も無意識に、感嘆の声を漏らしている。ダリオも登り切って、そこらじゅうに散らばる大小様々なレンガの破片に、足を取られないよう気をつけながら屋根の上を歩く。ティナが見ている先を確認してから、

「 いいところだろ？」

それは、見下ろした井戸の底のように、ゆらゆらと揺れていた。

「 海！」

ティナの指から彼方、無数の光が湧き出ている。

海が、銀色に輝いていた。

その海は太陽のある空と繋がっていて、海を進めば、あの大空へと辿り着くのは間違いなかった。どんなに高い場所から見ても遠い空が、今はあんなにも近い。きっとこの海は、空への架け橋なのだろう。

その海の名を、コートレディアという。

「 海もいいけど、こっちもな」

ダリオは反対側を指差す。つられてティナが振り返ると、そこにはフォネツアーレという都市があった。

「 ま、全部が見渡せるわけじゃないけどな」

ダリオのその言葉の通り、ここからフォネツアーレの全景を見渡せるわけではなかった。都市を見下ろすというよりは、都市と並んでいるといった感じで、二人が立つ屋根よりも高い建物はいくつも見える。絶景というわけではない。だからこそ、こんな屋根に登ろうなんて誰も思わない。しかしダリオには、その「都市と同じ高さ」というのが、不思議と心地よかった。

「 あの一番でかいのが大聖堂と大鐘楼。この街の中心で、教会区って言われてるな。んでその周りを商業区が囲んでて」

ダリオが街の案内を始める。決してうまい説明ではなかったし、記憶が定かではない部分もあった。それでもダリオは必死で記憶にあるフォネツアーレを辿ったし、ティナも夢中になってそれについていった。

ティナは一度も口を挟むことなくそれを聞いていて、ときおり目を閉じる。景色は、ダリオの言葉が見せてくれる。

「 あのへんに肉屋がある。ジャックの肉屋だけは行かないほうがいい。その親方が豚みたいなやつでな。 あー、つまりどう

いうことかっつていうと、狩人がとってきたやつを売らずに自分の腹にいれてるってことだ。本人は否定してるけどな。あの腹じゃ説得力なさすぎなんだよな。そういう意味じゃ、一度はあの腹を拝んでみるのもいいかもな」

ティナは、目を閉じながらおかしそうに笑う。

端から見れば、おかしな光景だろう。

二人は今、屋根と同じ高さから、フォネツアーレを歩いている。

「と、まあこんなとこだな。正直、おれが知らない場所もたくさんある」

説明を終えたダリオはそんなことを言う。ティナに説明したからこそ気づいたことだが、フォネツアーレという都市は、本当に広い。ティナはそれまで閉じていた目を開いて、

「そんなことない。ダリオに、たくさん案内してもらった。今日は、ありがとう」

初めて名前で呼ばれたことと、感謝の言葉と、今日一番の笑顔がいつぺんに押し寄せてきて、ダリオはあっけなく流された。何か言わなければならぬと思い、

「い、いや。やっぱ、実際行つて見ないとわからねえよ。フォネツアーレは初めてって言ってたけど、しばらくいるんだろ？」

ティナの笑顔が消えて、影が落ちた。ティナはそれを隠したいと思ひ、背後を振り向いた。そうしたのは、日差しと海の輝きが、影を消してくれると思つたからだ。

「わかんない」

そう、ひと言だけ。

その答えを聞いて、ダリオの中から消えたはずの疑問が、再び浮かび上がってきた。

お前は誰だ。

なぜ、年端もいかぬ女の子が、聖職者のような格好をしていたのか。

その高級な衣服はなんだ。貴族か何かなのか。世間知らずのくせに、ときおり見せる快活さは何なのか。本当はもつと、言いたいことがあるんじゃないのか。

初めて会ったあのとき、下唇を噛んで何を思ったのか。

「お前、どこからきたんだ？」

己が内から溢れる、山ほどの疑問をついに受け止めきれなくなったダリオは、少しだけ踏み込んでみた。

ダリオの言葉に、ティナの背中が微かに揺れた。今、ティナはどんな顔をしているんだろうと、ダリオはティナの背中を見ながら思う。そうして長い逡巡の末、絞り出すような声色で、

「プリエーツァ」

そう言った。国内の村なのだから驚くことはない。そう思って、ダリオは一瞬流しそうになったが、すぐに思い直す。符合したのは、河港でリカルド・バッチが言っていたことだ。

なんか様子がおかしかったんだわ。遠くの方で人集りができてんだよ。

「もしかして、今朝のプリエーツァの人集りって、」
その瞬間、ものすごいことが起こった。ティナがいきなり振り返ってきたのだ。ほとんど変わることがなかったその表情を、ひどく歪めて、

「ちがう!」

怒りなんかじゃない。すぐるような、悲痛な顔で、

「あれは、わたしじゃない!」

すぐにわかった。ティナは、ダリオがプリエーツァにいたと勘違いしている。

実際には、ダリオはプリエーツァにいたわけでもなければ、その事情を知っているわけでもない。だから、ティナが大声で叫ぶその真意は、ダリオにはわからない。

「いや、あんな」

「ちがうつ!」

聞く耳すら持たない。

まるでそれは、ダリオではなく、自分に言い聞かせてるようにも見えた。

ダリオはティナに見せつけるように、一度だけ深呼吸した。

「お前になんか秘密があるのは、見ててわかるよ」

その言葉に、ティナが息を呑む。

ダリオは、場違いとは知りつつも、ため息のような笑いが漏れた。まさか気づいてないとも思ったのか。

「その秘密って、誰にも話したくないことなのか？」

ティナは無言で、首を縦にも横にも振らない。困惑の色が見えるその目は、どう答えていいのか自分でもわからない、といった風だ。

「それ、他人に話しちまってもいいんじゃないのか？」

それを聞いて、ティナは強い目つきでダリオを見てきた。言いたいことはわかる。

「そういうのは、自分にとっては大事なことで、相手にとってはどうってことないことだったりするんだよ。ああいや、そうじゃないな。例えばさ、」

そこで言葉が詰まった。言いたいことははっきりしていたが、それは自分の経験からくるものであって、普段から考えているようなことではない。そういうものを言葉にするのは、思いのほか難しかった。

「子供が、父親の大切なもんを台無しにしたとする。高い服とか酒とか、なんでもいい。で、これを父親が知ったらとんでもなく怒るよな。一発ぐらい殴られるかもしれない」

視界の内に、ティナがこくつと頷いた。

「でもな、このことを別の奴、例えば友達なんかに話してみても、そいつはまず怒らない。『ふーん、それで？』って思うのが大半だろうな。場合によっちゃ助けてくれるかもしれない。つまりさ、秘密を明かすに当たって、相手によるんだよ。お前の秘密がどんなものかは知らない。誰にも話したくない秘密ならそれでいい。けど、

誰にも話せない秘密なんてのはないんじゃないかな　　っっておれは思う。だから、その、なんだ、」

おれには秘密を話してくれよ、とは言えなかった。

「秘密を話せる奴を見つけて、話してみてもいいんじゃないかな」

「　　うん」

ティナはそう頷くも、その表情は重苦の塊だ。ダリオの言葉に何を思い、何を悩んでいるかは、ダリオにはわからない。

もう少して、四練の鐘が鳴るかもしれない。

言うべきことを言い尽くしたダリオは、そんなことを思った。

ふと空を見れば、先ほどよりも太陽が海に近くなっていた。

昇りきった太陽は、あとはただ、落ちるだけだ。

どこか遠くの国から亡命してきた、高名な貴族かもしれない。

帰路。日の沈み具合からまだ大丈夫だろうと判断して、ダリオはティナを教会区まで送り届けている途中、そんなことを考えていた。つまり、ティナの「秘密」についてだ。

ダリオが後ろを振り返ると、そこには屋上を降りてからずっと顔を俯かせているティナが、ひと言も喋らずについてきている。

正面に向き直って、ティナには聞こえないようにため息をつく。

件のプリーツァは国の北端にあり、国境からもそう遠くはない。他国とは交流をしていないと聞いたこともあるが、むしろだからこそ、秘密裏に亡命を行うにはとっておきなのではないだろうか。教会と貴族は深い繋がりがあるし、クレメンティナ・リサリーティ、なんていう名前も大仰な響きに聞こえる。

自分の勝手な想像だというのはわかっているが、考えれば考えるほど、辻褄が合っているような気がする。そして、その程度の秘密なら、自分にとってはやはりりたいしたことのない問題だ。

よし。

ティナがどれくらいフォネツアーレにいるかはわからないが、すぐということはないだろう。次会うことがあればそれとなく探りを入れて、確認してみよう。

ダリオが心中でそう決め終わると、ティナが出てきた礼拝堂のすぐ側に着いていた。

「え、つと　じゃあ、おれはこれで」

ダリオがそう伝えると、俯いたままティナの肩がびくりと震えた。それでもティナはすぐには顔を上げず、ダリオが「帰っちまうか」と思い始めたときにようやく顔を上げ、

「　ダリオは、」

それは、別れの言葉ではなかった。瞳の奥に見える瞳孔が、不思議なくらい爛々としている。ティナは自分で意識して、ひどく小さな音量で言葉を紡ぐ。

「ダリオは、神様を信じる？」

驚いた。

普通に聞かれたら、どんな奴でも間違いない「信じる」と言う場面だ。現下の時代、公然と無神を語ることは、生きることが放棄することに等しい。

しかし、ティナは切実なほど真摯な顔で、誰にも聞こえないように小声で、ダリオに問うている。ダリオは一度だけ周囲を見回す。四練の鐘が近いので人通りは増えてきているが、小声で喋れば誰かに聞こえることはないだろう。

今この瞬間は、嘘は言っではいけない。そう思った。

「　いるわけねえだろ」

その答えを聞いた瞬間、ティナの中の何かが爆発した。

「こつち、きて」

「ちよ、な、なんだよ」

不意に腕を掴まれて、ものすごい力で引つ張られた。突然のことだったし、まさか振り払うわけにもいかず、ダリオはされるがまま、引きずられるようにティナの後をついていく。

わけのわからないうちに、一番近くにあった建物の中へと連れ込まれた。

そこは、礼拝堂の中だった。初めてその中に入ったダリオが、息を呑むような光景がそこにあった。

建物の中は意外に薄暗い。それは、どの窓も小さいからという理由もあったが、それ以上に、部屋のある一点が、まるで周囲の光を吸い込んでるかのようになり、一際輝いているからだ。

それは、胸に両手をあてて、まるで何かを抱きしめてるかのようになり、祈りを捧げている。

光を跳ね返すことなく透過させるその芸術が、これほど似合う像があるなんて。

天使のステンドグラス。

教会には興味がないダリオでも、胸を打つものがあるほどの出来映えだった。これで副次的な空間なのだというから驚きだ。主祭たる聖堂は一体どれほどのものなのか。

ダリオがあまりの光景に目を奪われていると、腕を掴んでいた手が離れた。いつの間にか、祭壇のすぐ手前まで引つ張られていた。

こんなところに連れてきてどうするつもりだろう。

教会の誰かに見つかったらどうしよう。

そろそろ四練の鐘が鳴ってしまうんじゃないのか。

状況が状況だけに、不安なことばかりが頭をよぎる。そんなダリオをよそに、ティナは背中を向けたまま、何かごそごそとしている。さつきからひと言も喋っていない。

何をしているのかと凝視していると、いきなり、生々しい白い肌が視界に映った。

ティナが服を脱ぎだした。

「ちよ、」

すぐにダリオは目を逸らす。あまりに脈絡のない行動だった。心臓が飛び出るかと思う。瞬間的に見えてしまったティナの肌は、白

くて細くて綺麗だった。

「ちゃんと見て」

はつきりとした声が、震えていた。

今のダリオにはそんなことに気づく余裕すらない。ティナが自分から見ると言っただから、自分に過失はない。そんな言い訳を、頭のなかの自分に言っている。

ちゃんと見た。

「え」

ティナの背中に、翼が生えていた。

ステンドグラスの天使のような、大きな翼ではない。少し大きなローブや、ケープかなにかで覆ってしまえば見えなくなってしまうような小さな翼だ。ティナの身体の震えに合わせるように、羽根も動いている。間違いなく、作り物なんかじゃない。神経が通っている。

天使だ。

それまで頭のなかで考えていたことすべてが、一瞬で消し飛んだ。そして、ダリオの頭を埋め尽くしたのは未知の感情だった。当たり前前だ。たった今、目の前で、未知のものをしているのだから。

意味不明な感情はすぐに行き場を失って、悲鳴のような短い声になつて外へ出た。

ティナが振り返った。目が合った。

ダリオは何か言おう、と思った。なんでもよかった。人として、言葉を交わせれば。

しかし、瞬間的に躊躇してしまった。こんな状況で何を考えているんだ、と思うかもしれないが、正面を向き上半身を完全に露出しているティナの、柔らかそうな肩、胸の微かな膨らみ、驚くほど細い腰回り。それらを直視することに、どうしようもない抵抗があった。自分とはまったく違う体つき。紛れもない、女の裸体。

その躊躇が決定的だった。建物を通して、厳めしい声が聞こえてきた。

誰かいるのか。

外からではない、中からだ。

さっきの悲鳴で、誰かが気づいた。

逃げなければ、と一度思ってしまったら、もうどうしようもなかった。逃げる理由はすぐに浮かんだ。見つかって捕まれば、罰せられてしまうかもしれない。四練の鐘が鳴ってしまったら、親方の容赦ない拳を受けることになる。

わけのわからないものは、恐ろしい。

ダリオは何度も転びそうになりながら、一目散に出口の扉へ逃げ出した。

振り返るとき、視界の片隅でテイナがこちらに向けて、手を伸ばしているのが見えた。

待って。

手を伸ばすだけでなく、もしかしたら、そう言ったかもしれない。どちらにせよそれは、ダリオを繋ぎ止める理由にはならなかった。

ダリオは動転しているくせに、わざわざ開けた扉を勢いよく閉める。まるで、何もかもを蓋するように。そのまま、周囲の目なんて気にもせず、ありったけの力で走り去る。

取り残されたのは、今にも泣きそうな顔をした女の子と、それを祈るガラスの天使。

もう少し待てば、どんなに大声で泣いても、ダリオには聞こえそうにない。

女の子は、天使だった。

仲直りの方法(1)(前書き)

ILLUSTRATION 一色恋
4303
4303
4303

仲直りの方法（1）

あの日の匂いは、今も忘れてはいない。

なぜってそれは、使っていた布団がどうしようもなく臭かったからだ。かちかちに硬くなった布地は不快でしかなく、湿気ですっかりカビ臭くなったそれは、まるで使い古した雑巾を頭からかぶっているようだった。

それでも、身体に掛けるものがあるだけマシだったあのころ。

「前から思ってたんだけど　それ、苦しくないの？」

遠い記憶の彼方に、そんな台詞が呼び起こされる。

自分と同じ年のくせに一回り背が低く、垂れ目で、気弱な印象を受ける少年。

「別に。気になるならサントイもやってみればいいだろ」
苦笑する気配。

「いや、ぼくはやめとくよ」

「『黒パン』にはわからねえよなあ」

「お互い様だね」

拗ねた感じの舌打ちをしてから、

「もう寝るぞ。日没にはもう起きるんだからな」

「うん。　ねえ、ダリオ」

返事をした癖に、話を続けようとする。人の話を聞いているのかわからないのか。

いつものことなので、ため息すら出なかった。

「なんだよ」

「ありがとう。きみがいなくなったら、ぼくも妹も、こうして生きられなかったと思う。きつと死ぬまで自分からはなにもせず、ただただ他人に救いを求めて。そして、飢えて死んでいた」

「なんだ、急に」

「急じゃないよ。いつも思っていた。きみはいつもみんなに囲まれてるから、言う機会がなかったんだ」

内側から上掛けを強く握って、

「べつに。おれはお前らを助けたくもりはねえよ」

すぐに、微かな笑いが聞こえて、

「きみにとってはそうだったかもしれない。けど、ぼくらにとってきみは、紛れもない救いの手だったよ。そういうのって、よくあることだろ？」

短い沈黙。

「もう寝ろ」

「うん」

より強く、上掛けを握った。今の自分の顔は、決して誰にも見られてはいけないと思う。

今でもよく憶えている。

猫に追い詰められた鼠にもし表情があれば、きっとこんな顔をするんだろう。

深い闇を待っていたあのころ。

確かに、そう思った。

徒弟の朝は早い。

徒弟たちは市民の起床基準である始礼の鐘が鳴る前に起きて、親方や職工が働き始める前に、工房の掃除やその日行う作業の下準備をしなければならない。早起きという意味では、教会の修道士も相当地に早い。徒弟はより肉体を使う作業が多い。故に徒弟という身分は、もつともつらい朝を過ごすと言われてる。

最大の困難は、起きることそのものだ。
なぜか。

それは唯一の目覚ましとなる、鐘の音を頼りにすることができないからだ。徒弟たちは毎日くたくたになった身体に鞭を打ち、自力で起きなければならぬ。これが非常に難しい。何年も徒弟をしている者でも、つい寝過ごしてしまうことがままある。？職人都市？のフォネツアーレともなればなおさらで、毎日誰かしらは寝坊をして親方にどやされている。胡乱な親方などは、その怒鳴り声でようやく目を覚ましたりもする。見る者には微笑ましく、当事者からすれば必死な、職人区の日常の一幕である。

ロツソの仕立て屋。

とくに寝坊することもなく起床した徒弟ダリオ・カルツアは、慣れた手つきで火をおこし、作った火種で蠟を灯す。瞬間的に燃え上がった出た煙の悪臭に、思わず顔を顰める。

火おこしが下手な徒弟は嫌われる。

火をおこすのが下手ということはつまり、何度も火打ちをすることになる。そうになると、その音で親方たちが起きてしまうことがあるのだ。もっとも、ダリオは徒弟になる前から自分でよく火をおこしていたので、それで怒鳴られたことは一度もない。野外でも火をおこせるよう、自前の火口箱を持っているほどだ。

ろうそくを安っぽい燭台に立てて、持ち歩く。

「ねみ……」

たいした光量もない、黄色い炎をぼんやりと見つめながら、ダリオはつぶやく。先ほどは「朝」と表現したが、実際は深夜のただ中であり、日の出はもう少し先の話だ。

ところで、フォネツアーレでは太陽が出ていない時間帯の「労働」は禁止されている。

しかし、徒弟というのは給金が発生しないため、労働ではなく「奉仕」という扱いになり、夜明け前に掃除をしようが下準備をしようが罰せられることはない。物は言い様というやつだ。ご都合主義もここまですぐと、ちよつと笑えてくる。

ダリオは静かに一階へ降りて、燭台を長テーブルの上に置く。

今日使いそうな素材を倉庫から出しておくか。それとも、作業部の掃除をしておこうか。

そこまで考えて、ダリオは重い息をついた。一日の始まりだというのに、鉛のような疲労感が身体の芯に残っている。

普段も決して楽ではないが、ここ最近はとくに忙しかった。依頼の数だけでいえば普段の倍以上。午睡にあてる三練の時間も削って空いた時間はすべて身体を休めることに消費した数日間。本当に疲れた。

だが得るものもあつた。とくに、親方であるマツシュ・ブロスキの仕事ぶりを、間近で見ることができたのは大きかった。思えば徒弟として、親方の技術を見るのは初めてだった。

本人の目の前では、口が裂けても言うつもりはないが、？口のツソの仕立て屋？の親方は間違いなく、一流の仕立て屋だろう。あれと比べたら、自分の洋裁など子供の遊戯に等しい。

ダリオはもう一度息を吐く。今度は細くて長い息だ。

長かった忙殺の日々も昨日で終わりだ。まったくの暇というわけではないが、それでも依頼の数はぐっと減るだろう。

少なくとも、この六日間は。

都市を覆い隠す深い闇。いつもは物音ひとつ聞こえない時間帯だが、今日に限っては少し様子が違う。これから起こる、楽しいことを待ちきれない子供のように。喧騒とはまだ言えない、ひそひそ話のような気配をそこらじゅうに感じる。

祭りの気配だ。

謝肉祭。創造の木曜日。

闇を照らす蠟の光が、一際強く燃え上がった。

あれから、一ヶ月以上経った。

あの日から、思考に空白が生まれれば、どんなに疲れていようともし起こす。遠くを見る瞳。水に濡れて下唇を強く噛む姿。とてもよく似合う服装。よく見れば照れたり微笑んだりしているのがわ

かった。あちこち歩いて、一緒に海を見て、屋根の上から街を案内した。最後に送り届けると、決意の瞳に見つめられ、礼拝堂の中に引っ張り込まれて、

そして、

あれから、あの女の子とは一度も会っていない。教会区に近づいてすらいない。

忙しかった、それは間違いない。

しかし、それとは別のところで、会うことを避けていたのだと思う。この一ヶ月、ただの一度も教会区に立ち寄る余裕すらなかったと言え、それは嘘だ。

無論、教会区に行けばまた会えるというわけでもないのだが。

あの女の子　ティナは、今どうしているのだろう。

もう何度考えたかすらわからない疑問。

突然、ダリオは眉根を寄せる。

疑問のあとに必ずついてくるのは、吐き気がするほど情けない自分にたいする陰鬱な感情だ。

誰にも話せない秘密なんてのはないんじゃないかな。

利いた風な口をきいて、ティナに空っぽの希望を見せた。お前の秘密を知ったところで自分はなんとも思わない、嫌いにならずに受け入れられる。そう信じ込ませて煽り立てた。ティナを思いやる気持ちなんで、欠片もなかったのだ。腹の底にあったのは、「他人の秘密を知りたい」という救い難い好奇心の塊。

関わらなければよかった。途中で立ち去る機会は何度もあったはずだ。

いつものように頭の中で決めつけて、それで満足していればよかったのだ。それをどういうわけか最後まで付き合ってしまった。その結果、あとに残ったのは声を震えさせて秘密を打ち明けたティナを裏切つて、置き去りにして逃げ出したという、途方も無い罪悪感。

ちゃんと見て。

最悪だ。

今度も、また。

外側から傍観しているうちは平気な顔をしているくせに、いざ当
事者になるとなにもできなくなる。本気の選択を迫られると、選ぶ
ことを放棄する。楽で、卑怯な生き方だ。

「準備、しねえと」

ぼつりと、つぶやく。

自分でもこれが逃避だというのはわかっている。しかし、目の前
にある「徒弟の仕事」という名の義務は、ひどく触り心地がよかつ
た。用意された仕事に頭の中を埋め尽くされれば、何も考えずに済
んだから。

けれど、それももう終わってしまう。

言葉とは裏腹に、ダリオは身動きひとつせず、ろうそくの仄か
な光を、ぼんやりと顔に受けている。まるで時間が止まっているか
のように、表情は動かない。

そう遠くないところで、気の早い馬鹿笑いが聞こえてきた。窓か
らは相変わらず、真っ黒な闇だけが差し込んでいて、笑い声は場違
いな幽霊の声のようにも思えた。

ダリオはつられるように、自嘲気味な小さな笑いを浮かべる。

こういう空気は嫌いじゃない。

真夜中とか、そんなのは関係ないだろう。

待ちきれないのだ。

祭りが、始まる。

午後。

三練の鐘が鳴る。今の今までダリオは昼寝をするつもりだったが、
ふと思いついて、外へ出ることにした。周囲の高揚にあてられたの
か、なにやら不思議なほど目が冴えていたからだ。これではとても
眠れそうにない。

工房の外に出た途端、人の群れが目についた。

祝祭の日になると恒例の光景だが、改めてフォネツアーレが大都市だと実感する瞬間だ。

そんな人混みを、気が抜けた視線で眺めていると、不意に、違和感を感じた。

目の前の光景は、何かおかしい。別に、人込みに紛れて奇天烈な格好をしている奴がいるとか、そういうわけではない。目の前の喧騒はむしろ、まるで列を成しているかのように整然としている。

と、そこまで考えてようやく気づいた。

人々の歩みに、流れがある。

いつもは思い思いの道を進んでいるのに、今日は明確な意志のよくなものを感じるのだ。

なんだろう。

ダリオは興味が湧いて、その流れに乗ることにした。服屋通りを抜けて、水車ばかりがある細工通りを見向きもせず北へ、雑踏する労働者の橋を渡りきったところで、ダリオはこの流れの行き着く先がどこなのか、おおよそ見当がついた。

そうと決まれば、わざわざ人通りの多いメインストリートを使う必要はない。ダリオは路地の中へと入っていき、細くて曲がりくねった道を足早に歩く。道中、どこかの屋内からどつと歓声があがって、ダリオはそれに少しだけ驚いた。むっとした表情を作る。祭りとなると一日中飲み食いしてる輩は多いが、一体なにが楽しいのか。ダリオには理解できない。

路地を抜けると、パンの形に木彫りした看板が見えた。激流のよくな人の流れに合流して、押し流されるようにさらに先に進むと、やがて、道が広くなった。

見上げれば、万丈の大聖堂。

そして人の目線の先には、商業の中心がそこにあった。

教会区。マルチエロ広場。

しかし、いつもの大広場とはまるで違う。

仮設とは思えないほど立派な露店が無数に建ち並び、それを大勢の人々が物珍しそうに眺めている。普段ならどれだけ走っても何かにぶつかるようなことはない広場なのに、今日に限っては一步でも人の流れに逆らえば、誰かとぶつかりそうだ。

すげえ。

ダリオは呆然と立ち尽くした。橋上のぼろい露店商なんて比較にならない、熟練した技術の塊ばかりが、そこにはあった。

祭りの喧騒は、止むことを知らずに続く。

創造の木曜日。

別名、職人の日。

そう昔の話ではない。まだ職人たちのギルドはなく、商人の下請けでしかなかったころ。現在のフォネツアーレように一カ所に職人を集めるようなことはなく、職人は郊外に点在していたが、それでも昔から、フォネツアーレには職人が多かった。そして、その時代の職人は、今よりももっと「創作の自由」がなかった。

人口が多いというのは、それだけで驚異になりうる。

支配層はこう考えた。　いずれ、職人たちが徒党を組んで反乱するかもしれない。

そこで商人たち　ひいては貴族たちは、対策を打った。大衆的な祭りの代名詞である謝肉祭の一日を「好きなものを作り、売りに出してもいい日」としたのだ。

アホとしか言いようがない。

所詮は、望めば大抵のものは手に入る富裕層の浅い考えだった。案の定、それは起爆剤となった。好きな物を好きに創作する喜びを知ってしまった職人は、「年に一度だけ」なんていう条件には納得しなかったのだ。あとは加速度的に暴動が起こるだけのはずだったが、状況が深刻になる前に教会の横槍が入り、神の名のもとに、職人たちは一定の地位と、ギルド制度を得ることに成功する。

その後は、小さないざこざはあったが、事態は終息に向かった。

祭りという名の風習を残して。

といつても、まったく昔のままというわけではない。昔は職人が好き勝手に商品を作っていたが、今は他国の特産品や、フォネツアールではあまり使われない素材や技術のものばかりが並べられている。日常的に娯楽の少ない市民にとつて、これが大層な刺激になるよう、今ではマルチェロ広場全域を使ったマーケットにまで発展している。

祭りの渦の中、人で形成された激流を見つめて、ダリオはふと気づいた。

どいつもこいつも、宝探しをする子供みたいな目をしている。

いつまでも突っ立っていたら通行人にわざと肩をぶつけられて、ダリオは我に返った。途端に居心地が悪くなって、広場の中へと歩を進めることにする。

祭りの中を一人で歩くのは、なんだか自分だけが宙に浮かんでいるようだ。孤独感よりも、自分が注目を浴びているような錯覚が勝っている。

しかし 本当に珍しいものばかりが並んでいる。見たこともない形状をした貴金属、瓶に詰められた白い粒の薬品、名前だけは知っている香辛料。都市内の通りのような統一性はないようだが、商品価値によって大雑把な区分けがされているらしく、高級品が並ぶ露店の近くには警備兵と思われる者が、銅像のように仁王立ちしている。

確かに、これだけ物珍しいと退屈はしないだろう と、ダリオはそう思う一方で、どうせ自分は何も買えないのだから、こうして眺めていても意味がない、とも思う。

そうして露店をいくつか回ったら、なんだか退屈になってきた。

現金な奴だと自分でも思うが、こういう性分なのだから仕方がない。ダリオはなんとはいはなしに、喧騒から目を離したくなって、頭上を見上げた。

そこには

「お前、ダリオか？」

いきなりすぎて、すぐに反応できなかった。

ダリオは数秒間、石になり続け、自分に向かってくる気配が目の前にきたところで、ようやく自分の名前を呼ばれたことを自覚した。声のあった方へ視線を向ける。

そこには、見知らぬ少年がいた。

ぱつと見はダリオと同じか、あるいは年上に見える。背丈は同じぐらいで、ろくなものを口にしていない筋肉の付き方をしている。力仕事を生業としている労働者だろうか、とダリオは一瞬そう思ったが、不自然なほど小綺麗な格好と腰に差してある物々しい短刀から発する気配は、絶対に間違いなく労働者などではなかった。

誰だこいつ。

「ダリオ。ダリオ・カルツァだよな？」

知らない奴に何度も名前を呼ばれて、ダリオは怪訝な顔をする。

「なんだよ、お前」

そう言ってから気づいた。

少年の目は、どこかで見たような垂れ目をしている。

少年は無理もないか、という表情を作って、

「サンティだよ。ほら、昔一緒にいただろ」

記憶にあるその名前は、目の前の少年とはあまりにも違う姿をしていた。

ダリオの懐疑的な視線を受けて、サンティと名乗る少年は頭を掻きながら唸り始めた。

「あー、じゃ、これでどうだ。昔、親に捨てられて餓死しそうだったところをお前に誘われて生き延びた。それから一緒にいたのは一年ちよつとぐらいたったか？ ああそれと、今でも白パンよりも黒パンが好きだ」

白パンというのは小麦でできた白くてふかふかの高級パンで、黒

パンというのはライ麦などを混ぜて作った堅くて安価なパンのことだ。黒パンのほうが好きだなんて、ちよつと味覚がどうかしていると思う。

サンティはそこで突然、ニタリと笑って、

「そして、おれには大好きな妹がいる」

ダリオは一瞬目を丸くして、震える息を吐いた。どうやら、本当にサンティらしい。他人が偽っている可能性もゼロではないが、そこまでして、金も地位もない自分を騙す理由はどこにもないだろう。そうしてダリオは、極めて自覚的に、笑みを作ってみせる。

「白パンなんて食べたことねえんだろ」

「ひでーな、そんなに貧しくないって」

奇妙な再会の言葉を交わし終わると、サンティは視線を上下させて、

「今、大聖堂みてたのか？」

短い疑問。それでもダリオは、内面を見透かされたような気がして、ひどく慌てた。

「いや、別に」

「あれすげーよな、おれも初めて見たときは開いた口がふさがらなかつたよ。あんなにでかくしてどうするんだろうな。神様にでも会いに行くつもりなのかね」

「相変わらず人の話を聞かないんだな、お前」

「そうか？」

サンティは小さな笑みを返してから、ダリオを上から下まで見定めるように眺め始める。

「なんだよ」

「ダリオのまね。そっちも相変わらず、無遠慮に人を観察する癖があるみたいだな」

言い返す言葉が見つからず、ダリオは口をへの字に結ぶ。

サンティはそれを見て、歯を見せて笑う。

「な、久々に会ったんだし、少し話そうぜ。ここじゃなんだし、別

の場所です」

「 ああ、そうだな」

少しだけ考えてから、ダリオは返事をした。視線は自然と、腰の短刀を見つめていた。

どうやら今日の祭りは教会区の一箇所に集中しているようで、教会区に通ずる道から外れると、驚くほど人がなくなった。それでも喧騒は続いているが、聞こえてくる物音や人声は先ほどとはずいぶん感じが違う。何かを叩く鈍い音。路地の一角に見える日陰からは、なめした獣の革によく似た臭いが漂っている。

今、ダリオはサンティを先導するように歩いている。はじめはサンティの後をついていたのだが、娼婦通りに入ろうとところで引き止めて尋ねてみれば、フォネツアーレにきたのはつい先日のことと、道がまったくわからないらしい。それならはじめからそう言うて欲しい。祭りの日は娼婦にとっては稼ぎ時なのだ。銭の持たないガキ二人が娼婦通りなど歩いていたら、目を血走らせた娼婦に様々な意味で素っ裸にされかねない。

目的地もなく歩いていると、ダリオは覚悟を決めたような小さな息を吐いた。

「お前、変わったな」

突然に投げかけられた言葉に、サンティは足を止めて目を細めた。そこには記憶にある気弱な面影はどこにもなく、刃物のような鋭さがあった。

「 まだ続けてるのか?」

その言葉に、サンティは明らかに馬鹿にした笑いを漏らす。ダリオの疑問には答えなかった。

「ダリオは変わらないな、昔のまんまだ」

腹の内側から、針で刺されたような痛みを感じる。

「当たり前だろ、一年も経ってないんだ」

そう、「あの日」から一年も経っていない。当時の自分は子供で、

そして今も子供だ。なのにかつて行動を共にしたサンティは、まるで別人のようになっていてる。

変わらない自分と、変わった友。

ダリオにしてみれば、自分が子供だという自覚がより強くなっただけの一年。だが、サンティにとっては昔の面影がなくなるほどの一年だったのだろう。それが例え短い月日であっても、かつては共に過ごした仲間でも、二人はまったく別の道を歩き出している。

ダリオは徒弟。サンティは。

「続けてるぜ、盗賊」

いきなり返ってきた答えを飲み込むには、少し時間がかかった。

「そうか。妹は元気なのか？」

サンティは、微妙な苦笑を浮かべて。

「ああ。昔より元気なんじゃないか？」

どこか他人事のような口調。

「妹は近国の小さな村で暮らしてる。おれは出稼ぎってことになってるんだよ。妹はつれていけない。仕方ないんだ、もう昔とは違う。もう『盗賊ごっこ』じゃない。おれは、本当に盗賊になったんだから」

自嘲気味に笑いながら、口早に喋るサンティに返す言葉が見つからなかった。間もなくサンティはすぐにダリオの表情を読み取って、からっとした笑みを浮かべる。

「そんな顔するなよ、別に嫌なことばかりってわけじゃない。仲間だっている。おれが自分で進んだ道さ。　ダリオは、どうやら別の道を選んだようだけどな」

サンティは先ほどやったように、ダリオの格好を凝視する。

なるほど、さっきのはそういうことか。

「別に、なりたくてなったわけじゃねえよ。運がよかったただけだ」

「だろうな。　鍛冶職か？」

「仕立て屋」

「うわ、似合わねー」

「うるせーよ」

サンティはけたけたと笑う。

「仕立て屋か。おれもダリオに仕立ててもらうかな、どこにあるんだよ」

「職人区　南島の中心あたりに服屋通りつてのがある。名前の通り、服屋ばっかの街路。その、看板に赤い布がかけられてるのがそうだ」

「赤い布？」

「ああ。『ロツソ』の仕立て屋だからな」

「はあん、とわかったのかわからないのか、曖昧な相づち。」

「それと、おれはまだ徒弟だからまともなモンは作れねえんだよ。そもそも、作った物は売れない。ギルドの協定でそうなってる」

「なんだそりゃ、つまんねーな」

サンティは心底残念そうな顔をしたが、はつと息を吐くと、すぐに挑発的な笑みを浮かべる。

「　　っていうか、金取るのかよ」

「高いんだようちのは。一番安い生地でも、買っていくのは店持ちの商人だしな」

サンティの顔は、諦めにとてもよく似た表情が張り付いている。

「なんつーか、やっぱダリオはおれとは違うな」

「はあ？」

「昔っからそうだった。みんなが食うもんに困って腹すかしてるときでも、ダリオは腹じゃなくてどっか遠くを見てたよな。その結果が、今のおれとダリオなんだろうな」

あふれるように出た言葉は、果たしてどこに向けられたものなのか。

「　　おれも腹をすかせてたさ。雲を食べ物に例えたりな。かわんねえよ。おれも、お前も」

その言葉に、サンティは一度だけ震える息を吐いた。後はもう、我に返ったかのように空々しく笑んで、ただひと言。

「そうかもな」

駄目か。

ダリオは思う。もし本当に、サンティの言う通りだとしたら。ダリオ・カルツアの人生は特別で、サンティの人生は人並み以下なのだとしたら。

盗賊を続けていると言ったときも、自分とは違う人間だと言いつたときも　サンティは、あんなに苦しそうな表情をしないで済んでいるはずなのだ。

そして。

自分も、こんなに嫌な気分には、ならないはずなのだ。

とりとめのない話を長々としていたら、四練の時間が近づいていた。

祭り中、ほとんどの市民にとって鐘の音はただの時報でしかないが、徒弟のダリオはそうもいかない。一度は親方に顔を見せなければならぬ、ということになっている。

頃合いを見て、ダリオはロツソの仕立て屋へ戻ることにした。立ち去り際、サンティに呼び止められた。サンティは小さな逡巡を垣間見せてから、平坦な口調になるよう努めて、こう言った。

「この街にあまり長居はしない。まあ、よっぽどのことがなきゃ、ロツソの仕立て屋、だったか？　そこに挨拶ぐらいはしてから出て行くつもりだ。また会えるかもわかんねえしな」

あとはもう、祭りの喧騒から逃げるように、サンティは腐った水の臭いがする路地の中へと消えていった。

どこかで、家畜の鳴き声が聞こえた。

帰り道。ダリオはついと目を閉じる。歩きながら目を瞑ることは存外に恐ろしく、すぐに不安になって目を開けた。開けた視界には大通りが映り、そこには変わらぬ祭りの喧騒があった。

突拍子もない考えが頭をよぎった。

大声で叫びながらあの人の群れの中へと飛び込めば、何もかもを忘れられるかもしれない。

そんな自分の姿を想像すると、とんでもない馬鹿な考えだと気づいて、一発で目が覚めた。

ため息をひとつ。

頭の中がぐちゃぐちゃだ。ティナと出会ったあの日から、日常に現実感がまるでない。サンティと再会したことだって、まるで夢の中の話のようだ。道を踏み外しているのを自覚しているくせに、その場所に呆然と佇んでいる。

自分は今、どこに立っているのか。

なにをしたいのか。

様々な疑問がダリオの頭の中に浮かんだが、そのどれもが言葉になることはなく、また答えになることもなかった。そうしてふと気づけばロツソの仕立て屋は目前にあつて、思わずため息が出た。今日一日、ため息だけで呼吸している気がする。

少々乱暴な感じでドアが開き、すぐに閉じる音。

つられて視線を向けて見れば、そこには兄貴分である職工、ジョシユア・チェスタが店から出てきたところだった。見慣れた後ろ姿に、ダリオは思わず安堵の息が漏れた。

「兄貴、どっかいくのか？」

ダリオは無造作に見知った背中に話しかける。そうして振り返ったジョシユアの表情は、隠しようのないくらい苛立ちに覆われていた。

ジョシユアは短く、

「お前には関係ねえだろ」

そう言い切ると、さっさと踵を返し、どこかへと消えてしまう。

ダリオは気後れというよりも、呆氣にとられてしばし棒立ちになっていた。珍しい、と思う。ジョシユアは要領のいい男だ。いつも飄々と物事をこなしてしまう器用さを持っているのに、ああも露骨

に感情を表に出すなんて。

親方とやらかしたか。

そんなことを考えながら店の中へ入ると、店主であるマツシユ・ブロスキが椅子にどっかりと座って、なにやら神妙な顔つきをしていた。ダリオは拍子が抜けた。てつきり、親方はジヨシユアと揉め事でも起こして、烈火の如く怒り狂っているのかと身構えていたからだ。とばっちりを食らわれないで済むなら、それに越したことはないのだが。

とにかくダリオは声をかけようと近づいてみると、マツシユがなにかの書類を手に持っていることに気づく。それは高価な羊皮紙で、文末には仕立て屋ギルドの印が大きく押されていた。わかることと言えはそれぐらいで、あとはどれだけ凝視しようが、字が読めないダリオにはその内容を知ることができない。

「親方、」

「おう、戻ったか」

とつくに気づいていたのだろう。ダリオが言葉を繋ぐ前に、返事が返ってきた。それだけでダリオは口をつぐみかけるが、どうにか喉の奥から絞り出す。

「今、ジヨシユアの兄貴とすれ違ったけど、なんかあったのか？」

師に対するものとは思えない口調。はじめのうちは敬語を使えとどやされていたが、今では何も言っていない。諦めたのだろう、とダリオは思う。相手を敬う言葉など生まれてこの方、使ったことがない。

マツシユは大きな鼻息を吐き、

「昇級会が近いからな。そのせいだろうよ」

昇級会とは、徒弟期間を終えた職工が親方になるための試験のことだ。詳しい内容はダリオにはよくわからないが、「マスターピース」と呼ばれる自身の代表作を制作し、審査にかける、ということ。は聞いたことがある。いや、しかし、それよりも。

「昇級会って、二ヶ月以上先じゃないのか？」

マツシユは今度は鼻で笑い、

「あいつにとつちゃ、二ヶ月しかねえってことさ」

そう言い切るとマツシユは椅子から立ち上がって、ぎろりという音が聞こえてきそうなほどの睨みをきかせた。なにしろダリオの頭がもうひとつあっても足りないほどの巨漢である。この半年で慣れてはきたが、内心ではいまだにビビっている。

「おうダリオ。おめえはジョシユアの心配をするほど偉くもねえし、暇もねえんだよ」

「あ？」

「急場の仕事がいっぱいだった。三日後の『象徴の日』までに上衣を用意してくれてな。まあ内容も客もたいしたこたあねえが」

マツシユの言葉を理解するのに、数秒の時間が必要だった。

「はあ！？ それ受けたのかよ！？」

答えではなく、平手が返ってきた。

「てめえ、オレの仕事に口答えするたあどういう見だ！！」

ダリオはたまらず尻餅をついて、打たれた頬を押さえるフリをして口を尖らせる。そうしないと、もう一発平手が飛んでくるからだ。

「ああ。まあ、今回に限って言えば、オレの仕事じゃあなくなる可能性もあるな」

「？ どういう意味だよ」

「ダリオ。お前、やってみろ」

「は？」

何を言っているんだこの親方は。という表情には目もとめず、マツシユは続ける。

「生地はすでに用意してあるし採寸もオレが済ませた。あとは作図を見てお前が仕立てりゃいい。できんだろ？」

できるかばか。

「い、いや。おれはまだ一回も仕立ての仕事なんてやったことねえし」

「ああ？ お前、オレに隠れて何度もやってんだろうが。使い物にならねえボ口布で、小遣い稼ぎによ」

喋っている途中だったせいか、かなりまぬけな感じで口を開けたまま、ダリオは石になった。

マツシユはそんなダリオを見て、心底おかしそうにせせら笑い、「オレにだけ見つからなければいいと思ったのか？ 物を売ってのは、お前が思うほど単純じゃねえんだよ。例えばよ、お前が作ったもんをそのへんの旅商人に売ったとして、そいつがそれを隠したままこの街を出れると思うのか？」

絶句しているダリオにはない知識だが、商人は商人で「商人会」というギルドが存在し、フォネツアーレに出入りする商人の管理をしている。もちろん職人たちが作り出した物も、例外ではない。

ダリオの頭のなかでは、先ほどサンティに向けた言葉が、記憶の底から再生されていた。

そもそも、作った物は売れない。ギルドの協定でそうなる。

胃の中に、鉛でも入ってるかのような重さを感じた。

「おい、勘違いすんなよ。別に、珍しいことじゃねえんだよ。いとこの坊ちゃんなら苦労はねえんだろうがな。どこの徒弟も似たようなことやってやがる。だからな」

その棘の抜けた言葉があまりにも意外で、ダリオは顔を上げて見ると、

「オレがこの件を問題視しねえ限り、なにも困ったことにはならねえよ」

邪悪な笑みが、そこにあった。

憤りの感情は続かない。怒りに限らず、激しい感情というのは得てして抑制されるものだ。人の身体は、怒り続けることを許してくれない。

ダリオは工房の中に入った途端、眩暈を覚えた。マツシユの理不

尽な脅迫によつて生まれた怒りの熱は、その頃にはもう灰でしかなかつた。心の内で灰の触り心地を確かめながら、自分は自分が思っている以上に、勝手な奴なんじゃないかとダリオは思った。脳天気といつてもいいかもしれぬ。

見慣れたはずの部屋に、見慣れないものがある。

それは、他ならぬ自分だ。

ただ材料を運ぶだけの雑工ではない。親方の留守を見計らつて忍び込む、悪戯をする子供でもない。

今、一人の職人として、この工房に立っている。

「ほらよ」

背後にいるマツシユから、複数の薄い木板が手渡される。そこには図形と記号が描かれていた。ダリオからすればそれは、複雑かつ精巧で、確かな意思のある「言葉」であつた。

型。

これこそが、ただの「布」を、人が身にまとう「服」にする、魔法の呪文だ。

聖職者や名のある貴族が相手になると、これが木ではなく細かい製図ができる紙になる。先ほど親方が「たいしたことない客」と言つていたが、その通りなのだろう。それでも自分からすれば、考えられないぐらいの財産を持つ人物なのだろうが。

知らないどころか、見たこともない奴の服を仕立てるのか。

ふとダリオの頭をよぎつたその考えは、何も無いところから生まれた針のような感触だつた。

「おい。なにぼうつと突つ立つてやがる」

その言葉で目が覚めた。今は、やるべきことをやらねば。

ダリオは無言で歩を進めて、渡された型を製図板に立てかける。が、そこから先は石のように動かない。頭が回らない。背後の視線と目の現実が、胃を締めつけてくる。

くそ。なるようになれた。

やけくそな感じの深呼吸を一発。

それまで泳いでいた視線の焦点を、意識的に型に合わせて、仕立てるものの骨子を読み取るうとする。はじめはまるで集中できなかつたが、だんだんと頭の中に服のイメージが形作られていくと、ダリオはひとつの結論を出した。

なるほど。確かにこれはクソ仕事だ。

祭りの時期というのは華やかな衣服の依頼ばかりだが、これはそういうわけではないらしい。生地も下等なものだし、作りもただの上掛けに簡単な装飾をつけられただけだ。よくこんな依頼をロツソの仕立て屋で出したな、とすら思う。わざわざ職人に注文する必要はどこにもなく、大きな古着屋なら似たようなものが半額以下で手に入るのは間違いない。

しかし、これならなんとかなりそうだ。

その自信が発火点となった。仮縫い用のダミー生地を引つ張り出して、頭の中に叩き込んだ寸法を生地に引いていく。この短時間で完全に記憶したのか、ダリオは型を一度も見直すことなくその作業を進めていく。

そのうちに頭の片隅に余白が生まれた。その隙間を埋めようと、想像力が入り込んでくる。

どうせ会うこともないんだ、勝手に想像させてもらおう。

ダリオは目を閉じた。頭の中で「依頼主」をイメージする。

型の内容からしても、依頼主があまり裕福ではないのが見て取れる。肩幅は小さく小柄。型から察するにこれを着るのは、年頃とすら言えない若い娘だ。

頭とは別のところで身体が動く。ダリオは目を開いて裁断を開始する。手は慎重ながらも淀みなく動き、刃が布を走るたびにそこには意味が生まれた。

その意味は、誰のためにあるか。

疑問。年端もいかぬ娘が、名の通った仕立て屋に依頼をするだろうか。

ダリオは想像する。そうして見えてくる姿は娘のものではなく、

その親の姿だった。

つまりこういうことだ。たいして裕福でもない一家が、謝肉祭という大祭のために用意した、娘へのプレゼント。身内か友人が集まって小さなパーティがあつて、それに着ていくものかもしれない。謝肉祭は宗教的な祭りではなく、民衆のための祭りだ。パーティが開かれる数などそれこそ何十とある。

実際どのような経緯で依頼され、どこの誰が着るのかわからない。けれども、ダリオはそう決めた。この上衣は、普段は地味な衣服しか着れない、女の子が着るための上衣だ。

ダリオの動きのひとつひとつが鮮明になつていく。見る者によっては舞踏か演劇かのように見えるであろうそれは、疑いようのない「創作」であつた。

自分がやっていることは 赤の他人と目を合わせるのは少し怖い。見知つた人だと、じつと相手の目を見ていられる そういうのと同じことだ、とダリオは思う。この衣服は誰のために作り、なんのために作るのか。自分にはそれが必要なのだ。

あとは深く深く、自分の意識の中へと潜るだけでいい。

そんな心中の隅っこに、ある想念が浮かんできた。

あの翼のある少女には一体どんな服が似合うだろう、と。

自分にとってはあつという間だったが、終わってみればすでに日が暮れていた。日没が早い時期ではあるが、あまりの時間の経過にダリオは少し驚いた。時間を忘れるほど集中したなんて、生まれてはじめてだと思う。

終わった、といつても完成ではない。仮縫いを済ませて「見れる形にただけである。生地も下準備用のもので、今回ダリオが行つたのは、いわば本番前の練習のようなものだ。ここから実際に仕立てる生地を使って仮縫いし、その後はじめて本縫いを始める。手間は非常にかかるが確実な三工程。

マッシュはダリオが作ったものを手にとって、先ほどからじつと

見つめている。ダリオの位置からでは防壁のような大きな背中しか見えず、その表情を知ることにはできない。

まあ、自分から見てもかなりお粗末なモノだ。左右の寸法すら合っていない。

当たり前と言えば当たり前である。半年ちよつとで技術が身につくなら、仕立て屋職人なんてものは、この世に存在しなかつただろう。

ダリオが頭の中で言い訳じみたことを考えていたら、唐突にマツシユが振り返った。

あ、やばい。

表情を見て、そう考えるのが精一杯だった。振り返るとほぼ同時に頭上から振ってきた拳になど反応できるはずもなく、ダリオはもろに拳骨を頭にもらうことになった。

「てめえ、なんだこれは」

憤怒の顔で迫ってきた。痛みと恐怖と矜持がいつぺんに吹き出してきて、先ほど考えていた言い訳が口から溢れ

「型とまったく違うものになってるじゃねえか！！ 縁に派手な模様なんて、どこに書いてあるんだ！！ 目でも瞑ってたのかこのバカやろうが！！」

まったくもってその通り。

言い返す言葉は、なにひとつなかった。

冷静に考えれば、おかしな話だったのだ。

晩刻。日が完全に落ちれば、都市は寝静まる。それでも時折、騒ぎの気配が耳に届くことに、ダリオは呆れを通り越して驚く。この時間の照明とさえは、松明と蠟の火ぐらいしかない。よくそんな状況で騒げるものだ。

ダリオはいつものように上掛けに全身を包んで、狭すぎる闇の中

に息を潜めている。今夜は月が出ていないので、そんなことをしなくても真つ暗なのに、上掛けから出てくる気配はない。

そう。冷静に考えれば、おかしい話だった。

そもそも、入門して半年と少しの徒弟に、客相手の「商品」を作らせるわけがないのだ。もちろん、ギルドの協定にしっかりと徒弟の作品の売買は禁止とあるのだが、それ以上に親方側にメリツトがない。自分より下手な作品を売り物として出すなど、客がどんな相手だろうと店の信用を落とすだけだ。いいことなどひとつもない。つまり、自分は親方に試されたのだ。

依頼があるなどと嘘をついたのだ。本物の仕事と思わせて、それを自分やらせて、仕事にたいする姿勢や技量を測ったのだろう。

いや、あの依頼自体は本当にあったのかもしれない。本当に依頼があつて、それを受けたときに、親方がふと思いついた可能性だつてある。

親方の部屋に忍び込んで探せば、そのへんの真偽はわかるかもしれないが、ダリオにその気はない。言葉にはしづらいが、今さらそんなことを確認するのは、格好悪いとダリオは思う。

それに　自分が本当にあの依頼を受けることは、どう転んでもなかつただろうし。

ダリオは大きく舌打ちをする。闇の静寂の中でその音は鋭く、そして残響を残すことなく瞬く間に闇の中へと溶けていった。

好意的に解釈するなら、腕を認められ次のステップにいったということだろう。なにしろ、今までは親方が作業場にいるときは、その中に入ることすら許されなかつたのだから。

しかし、散々なデキだったし　いや、デキについては何も言われなかつたか？　とにかく、あんな結果になつてしまつては、まだしばらくは雑工のままかもしれない。

はあ　とダリオは大きく息を吐く。布に丸まっていると口の周りに自分の息が跳ね返ってくるので、少し気持ち悪い。

今日は祭りの空気に呑み込まれたような、すさまじい一日だった。

こっちにだって心の準備というものがあるのだから、もう少しペー
スというものを考えて欲しい。

いや、

自分にとつての「祭り」は、一ヶ月以上前から始まっているのだ
ろう。

そして、

どこかで大きな声と音が一斉に響いた。少しして怒気の混じった
声。我慢ならず誰かが怒りだしたのかもしれない。あんな喧噪が
すぐ側で起こっていたら、自分だって眠れやしない。

騒ぎは耳に届く距離。なのに、ダリオにはそれがとても遠くの出
来事を感じる。

それでいいと思う。孤独を感じたまま、見えないもの見るとい
う行為が、気分を落ち着かせてくれる。今はこの深い深い闇を、ただ
見つめていればいいのだ。

祭りは、まだ終わらないのだから。

仲直りの方法（2）（前書き）

i 3 6 3 3 6 | 4 3 0 3 <

ILLUSTRATION 一色恋

仲直りの方法（２）

記憶というものは大事なことを覚える代わりに、その何倍もの出来事を忘れるということだ。

ダリオ・カルツァが思い出せる中でも最も古い情景は、優しい父とその膝の上に座る、今よりもずっと幼かった自分。そして、父が語り聞かせてくれた幻想的な物語の旋律だ。

貧しくはなかったが裕福な家でもなかった。本なんて高価なものは一冊もなく、だから父はきつと、詩人が詠う物語を必死に覚えたのだろう。聞かせてもらった話のほとんどを今も思い出せるのは、その熱意が伝わったからに違いない。

しかしその頃のダリオにとっては、近所の遊び仲間と川で泳いだり木に登ったりすることのほうが重要だったようにも思う。どんな風に遊んでいたのか、今のダリオにはまるで思い出せないので、結局は推測でしかないが。

「 母さんは、何が好きだったの？」

ダリオを産んですぐに亡くなった母の話の間ごとすると、父は決まって悲しい顔をした。

白状すると、あの頃の自分はそれをわかっていたふしがある。理解しながらも尋ねることをやめなかったのは、会うことが叶わなかった母を想う気持ち などではなく、大人である父が困った顔をするのが楽しかったからだ。ふと、その頃の自分は、小さな虫を踏みつぶして遊んでいたことを思い出した。

「 そうだなあ 。 ああ、彼女は、白ユリが好きだったな」

今も昔も、母親というものに特別な思い入れはない。顔も声も知らない人。それはもはや他人だ。もし母に対して寂しいという思い

があるとするれば、それは母がいない寂しさではなく、母を知らぬ寂しさだろう。

「しらゆり？」

「とても綺麗な白い花だよ。今度ダリオにも見せてあげよう」

「ほんと？」

「ああ、約束しよう」

何もかもが輝いていたあのころに見た白ユリの花の美しさは、今も忘れていない。

いや、そうじゃない。忘れていた。

忘れていたけれど、思い出したのだ。

かつて見た、母が好きだったという白ユりに、とてもよく似た白い花を見たから。

その瞬間、霧がかかった映像が瞬間的に脳裏を過ぎって、ダリオは考えた。

はて、あの白い花は、一体どこで見かけたんだっけ。

そして、ダリオ・カルツァは目が覚めた。

妙な夢を見ていた、ような気がする。

目が覚めたという自覚だけで上半身を起こすも、頭の中がかなり重く思考がまとまらない。吸い寄せられるように再び仰向け倒れた。狙ったわけではないが、それで少しだけ目が冴えた。

なんで起きたんだ？

そう思ったのは、身体中に眠気がこびりついていて、ろくに眠った気がしないからだ。

寝惚け眼の視線だけを動かして窓の外を見る。月も星も出ていないのか、暗すぎて窓縁の輪郭しか捉えることが出来ない。少なくとも寝過ごした可能性はなさそうだ。

次いで耳をすましてみる。いつもなら自分よりも早く活動してい

る徒弟たちの気配を感じるのだが、聞こえてくるのは水路から流れる微かな水音ぐらいだ。やはり、かなり早く起きてしまったらしい。おそらく深礼の鐘　街が完全に寝静まったあとに鳴らす、祈祷師たちが祈りを始める合図となる鐘　の時間帯だろう。

ダリオは目を閉じずに呆然と視線を泳がしながら、意識の中に残っている、ぼんやりとした印象の手触りを確かめようとする。

寝直す気になれないのは、同じ夢を見るのが嫌なのか、それとも夢を見たことを忘れたくないのか。自分でもそれがよくわからなかった。ただフォネツアーレの象徴とも言える水音だけが、頭の中で繰り返し反響していた。

ふとダリオの視線が、ある一点でぴたりと止まった。

視線の先にあるのは、蝋燭と燭台。

聞こえてくる水の音が、少しだけ遠くに感じた。

綺麗な水が見たい、とダリオは思った。

普通、宵の口が開いてから外出する者はいない。

なぜなら照明といえば火の灯りであり、例え鼻をつまみたくなくなるほど臭い獣脂からとった灯でも、タダではないからだ。人々は日没とともに眠り、日の出とともに起きる。

一部の例外を除いて。

その最たるは闇を好む賊と、それを迎え撃つ兵だ。他には怪しげな場所で行われる不気味な仮面舞踏会だったり、怨嗟という名の祈りを捧げる邪教だったりだ。闇が落ちれば人もまた闇を見せる。陽とともに生きている者は、夜の街を歩こうとは思わない。

しかしダリオから言わせれば、それはただ闇の中での歩き方を知らないというだけだ。

闇に生きる人でも、人は人なのだ。

簡単な話だ。まず、誰であろうと闇夜を歩くには絶対に火が必要になる。なので自分以外の火には近づかなければいい。灯りに注意すること。これだけで危険にあう確率はぐっと減る。

しかし、稀に闇に溶け込んでいる危険も存在する。そういう場合は、歩く場所に注意すればいい。貧困区や細い路地はもちろん、都市の外に近い場所もできれば近づかないほうがいい。それでも何者かに絡まれることがあれば、護身用に短剣でも一本持っておけば大抵は身を守れる。そういう危険は、思慮の欠けた衝動的なものだからだ。

ダリオはそれを知っている。知識ではなく、経験として。自分も、闇に生きる人だったから。

水面を揺らす風が吹いた。蠟の火も、その灯りから生まれた影も、ゆらゆらと揺れている。

この時間の風は冷たい。もう目は完全に覚めていたし、先ほど見ている気がする夢の残滓は跡形もなく消え去っていて、今ではなんの感情も湧いてこない。そもそも夢など見ていなかったのではないか、という気すらする。

それでもダリオは歩を進める。

フォネツアーレの都市内部には、エヴェル川から流れる水を利用した大量の水路が存在する。この水路は市民の生活や機械の動力となる水車などに使われており、今日フォネツアーレが技術大国としてその名をさせているのは、この「水の力」があるからこそである。だがこの水路には大きな欠点がある。それは、遠くから一見するだけではわからない。しかし水際まで近づいたり、船上から水を覗き込めばすぐさまわかる。

水が汚いのだ。それも、とんでもなく。

エヴェル川の水が汚いのではない。都市に住む人間が水を汚しているのだ。とくに酷いのは人々が垂れ流す糞と尿であり、それらの処理方法は水路に投げ捨てるというものだ。無論、投棄用の水路はあるが、そこに運ぶのを面倒くさがって近くの水路に投げ捨てる輩が必ずいる。

これに対して、貴族たち行政機関は対策を打った。とくに大々的

だったのは「決められた水路以外で糞尿を投棄した場合罰金を科すと「貧困区の水路を完全に隔離する」のふたつだ。

後者の対策について少しだけ触れておこう。当たり前といえば当たり前前なのだが、貧困区の治安の悪化に拍車をかけた。都市の中にあるのに貧困区だけは腫れ物のように扱われ、「貧困区の水路の水を飲むと病気になって死ぬ」とまで言われているほどである。あながち間違いではないのがさらに恐ろしい。

話を戻そう。そういった対策は一応の効果はあったのだが、やはり完全になくすまでは至らなかった。

豊かで美しい水の都の、文字通り汚い部分である。

人が住まう都らしいと言えば、そうなのかもしれない。

しかし、人と同様に水路もまた汚いものだけではないのだ。

その水路は「水浴び路」と呼ばれ、そのほとんどは人々が歩く道の下に流れている。これは廃棄物を投げ捨てられないようにするためだ。ダリオが今現在歩いている道がまさにそうであり、足を踏みしめるたびに地面の空洞が足音を反響させている。

冷え冷えとした、無色無臭の空気がどこからか流れている。

その道をたどりながら進むうちに足下の反響がふつとなくなり、隠れていた水路が顔を出す。その水路を見下ろしながら、さらに進んでみれば水路は円形の水槽へと姿を変える。

その丸い池はダリオの膝程度の深さしかないはずだ。なのに、真っ黒な闇に照らされる水たまりは、どこまでも沈んでいつてしまいそうな底なしの穴に見えた。綺麗な水だからこそ、深い闇をより深く浸透させてしまうのかもしれない。

この時期のこの時間だ。水温はかなり低いだろう。

さすがに足を突っ込む気にはなれないが、綺麗な水を直接手で触れてみたいとダリオは思った。その願望は、立ち入り禁止の領地に足を踏み入れたいという、子供の好奇心によく似たなにかだった。

唐突に風が吹いた。闇から闇へと繋ぐ継ぎ目が揺らめいて、ダリオの足が我に返ったかのように止まった。

明かりが見えた。

池よりも手前の水路。ダリオが通ってきた道にかけられている橋の真下。確かにダリオからは死角ではあったが、どうして今まで気づかなかったのだろうか。一度意識してしまえば、周囲の闇を裂く黄色い光は明らかに異彩を放っていた。

ダリオは、自然と腰にさした短刀に視線がいった。力をいれないと細いロープすらまともに切れないようなボロナイフだが、ないよりはマシだ。

いまさら意味はないだろうが、手元の火を消しておく。それから周囲の闇に警戒の視線を走らせる　　が、とくにこれといった異常は見当たらない。

というよりも、人の気配がまったくしない。
？

妙だ。一度は側を素通りしたのだから、こちらに気づいていないとは思えない。

ダリオは再び周囲を見渡して、やはりなんの気配もないことを確認すると、おそろおそろ橋まで近づいて、音を立てないように身を乗り出して橋の下をのぞき込んだ。

闇から切り取られたようなかがり火だけが、そこにはあった。

他には何も無い。人もいない。

ますますおかしい。火はそこにあるのに、人だけがないなんて先ほどと同様の好奇心が頭をもたげてきた。ダリオはこれ以上ないというぐらいに人影がないかを確認しながら橋の下へと近づいていき　　結局なにも起こらないまま、持ち主のいない燭台の元へとたどり着いてしまう。

地面には破れた衣服、壁には血痕　　なんてものはあるはずもなく、ただ蠟の火だけが、そこにはあった。

まるで亡霊の仕業だな。

ダリオは想像する。それは闇を照らすかがり火で人を誘う。今夜のように月のない夜はとくに絶好の日であり、光に群がる蛾のよう

に人は火の光を欲する。そうしてまんまと誘い込まれた阿呆は、背後から魂を抜かれてしまうのだ。

その阿呆とは、つまりは自分のことである。

一瞬、ダリオの顔に自嘲じみた笑みが浮かんだ。身をかがめ、自分の燭台を床に置き、取り替えるように放置されている燭台を手に取りうつとして　いきなり肩に手が置かれた。

「誰かと思えば、ぬしか」

口から魂が出るかと思った。

ダリオは飛び上がって驚いたし、言葉にならない声も出た。肩にのせられた手から逃げようとしたら派手に体勢が崩れ、もう一步下がっていたらケツから水路に落ちていたに違いない位置に尻餅をつく。

身体をこわばらせたまま視線をあげると、そこには確かに亡霊がいた。亡霊のくせにやけに小柄だ。格好もやたら貧相で、輪郭もくつきりとしている。そして、どこかで見覚えのある笑みが張り付いていることまで認識すると、真っ白になった頭の中が少しずつ色づき始めた。

亡霊は、年寄りに見えた。

街掃除が大好きなクソ爺。名前は　　そういえば、聞いたことがない。

「おお、まるで悪夢から覚めたような顔じゃな。まさか眠ったままここまでできたのか？」

「　　んなわけあるか」

爺は心底おかしいといった具合でひとしきり笑い、それからダリオに向けて手を差し出した。

ダリオはそれを逡巡したが、

「湯浴みをしたばかりじゃ。安心せい」

まったく、このクソ爺はどこまでが打算なのか。

ダリオはうんざりした顔で差し出された手を軽く払って、自力で立ち上がる。

「つれないのお」

「あんたの細腕をつかむぐらいなら、そのへんの雑草でもつかんだほうが安心できる。で、この蠟燭立てはあんたのなのか？」

「うむ。そうじゃが？」

「いや、なんだってこんなところに置いたんだよ」

爺はふむ、と考えるように顔を俯かせる。間もなく顔をあげて、地面に置かれたままの、見るからにオンボロの燭台を拾い、自分の胸よりも高く持ち上げる。闇と光が同居したクソ爺の姿は、はっきり言ってかなり不気味だ。知った顔でなければ、一にも二にも逃げ出していたに違いない。

「ほれ。火の光があたりを照らしているじゃろう」

そう言つて、光に照らされた頭上の建物を指差す。

「だから？」

「上の道を歩いていれば、明かりにすぐに気づくじゃろう。しかし、そこよりも低い位置にあるここからだともいかん。明かりに気がつくのは、上にいる相手よりもずっと遅かるう」

そう言つて、爺はわざとらしく痛そうに首に手をあてる動作をする。確かに、水路が通っているこの道からは遮蔽物が多く、上からの照明には気づきにくいだろう。しかし、それと燭台を置き去りにしたことが、ダリオの頭の中では繋がらない。

爺は一拍おいて、ダリオの表情を盗み見るように確認すると、言葉が続ける。

「さて。下の道にいる者が蠟の明かりに気づいたとする。しかし自分が気づいたということは、相手はとつくにこちらに気づいている可能性が高い。さりとて、今さら火を消したところで、こちらが気づいたことを相手に気づかせてしまうだけじゃ。ならばどうする？」

なるほど、と不覚にもダリオは感心してしまう。

「そもそも、なぜ見えもしないのに、そこに人がいるとわかる？それはこの蠟燭の火が放つ光が原因じゃ。なら原因を取り除いてしまえばよい。燭台を捨て置き囷とし、人は闇に紛れて立ち去れば、

まず追跡されることはあるまいよ」

「あんた、やたら詳しいんだな。若い頃は夜盗でもやってたのか？」

ダリオの憎まれ口に、クソ爺は笑顔で返し、

「いやいや。年の功、というやつじゃよ。ぬしよりも長く生きてきた、ただそれだけじゃ」

説得力があるようでなさそうな理由だな　とダリオは思った。

それもまたダリオが若く、クソ爺が老いぼれという証拠なのかもしれない。

「しかし、ぬしはずいぶん妙な動きをしておったな。通り過ぎたと思えば、火を消してここまで戻ってきおった。なにをしていたんじや？」

ダリオは目をぐるりと回して、とても嫌そうな顔をする。一度は明かりにまったく気づくことなく素通りしたことを言いたくはなかった。かといって、このクソ爺にその場限りの嘘が通じるとも思えない。

「散歩」

機嫌悪そうに短くそう言い切ると、爺は笑った。

「そうか、散歩か。実はわしも散歩をしておいてな。ほれ、空を見てみい。星がひとつとしてない。これほどまでに暗い夜はそうないぞ」

こんな夜更けに散歩なんてかなり胡散臭い、とダリオは思ったが、それを言うとも自分にも跳ね返ってくるので、押し黙る。

「それに今は、今日のうち唯一、静かに過ごせる時間だからのう」

爺がつぶやくように発したその言葉に、ダリオは不意にため息が漏れた。

「どうした？」

「なんでもねえよ」

ダリオはそう言っつて、まるで大事なものをそこに落としてしまったかのように、水路に流れる冷水をじつと見つめ続ける。爺は隠すことなく、その様子を横目で眺めている。

「のう」

「んだよ」

「悩みがあるなら聞くぞ？」

「はあ？」

目を丸くするダリオをよそに、クソ爺は思いのほか真剣な顔つきで視線を闇に走らせ、

「なに、わしは神の声を聞くことができんが、悩める少年の声なら聞けるのでな」

「あいな」

出かかった汚い言葉が詰まる。

顔見知りと言っても何度か言葉を交わしたぐらいで、今回だって偶然にすぎない。時折、街の中で見かけはするが声を掛け合うような仲でもない。

つまりこのクソ爺と自分は、完全に赤の他人だ。

それなら、胸の内にあるものを吐き出したところで、それは井戸に顔をつっ込んで叫ぶことと何も変わりはない。　ダリオは、そう決めた。

「　会ったばかりの女の子を傷つけたんだ」

さすがの爺も予想していなかったのか、口を小さく開いたまま、ダリオをじつと見つめている。ダリオはその様子を視線だけで見ながらも、あふれ出す言葉を止められなかった。

「その子には、誰にも言えない秘密があった」

誰かに話して、答えが欲しいわけじゃない。

ただ誰かに聞いてもらいたかった。

「そして、その子はおれを信頼して秘密を打ち明けた。おれはそれを　受け入れられなかった。逃げ出したんだ」

一瞬、水が流れる音が周囲を支配する。爺は顎に手をやって、短く唸り、

「　今もそうなのか？」

「え？」

「今もまだ、その秘密とやらを受け入れられんのか？」

「わからない」

頭の中に浮かんだのは、背を向けた女の子　ティナの姿だ。その背にある白い翼が、その目映さと同じぐらいに、強く記憶に焼き込まれている。

そこで映像がスライドした。折れてしまいそうな細い身体、触れるだけで汚れてしまいそうな白い肌　そこまで考えて、ダリオは強引に記憶をねじ切って捨てる。

天使の翼と女の子の裸を並べることが、とてつもなく愚かで卑猥なことに感じた。今この瞬間、自分はフォネツアーレの中でもっとも最低な人間だと思う。

それでも、

ふと、目の前の水路に視線が向いた。深い闇など無関係に澄んだ水は路を走る。

どろどろの感情の中に、はつきりとしたものが浮かんできた。

それでも、あの身体はまきれもなく　小さな女の子だったんだ。

「わからない。けど、もう逃げ出すことはない」

ダリオは視線を逸らすことなく、強く口調でそう言い切る。

爺はそれまで固くしていた表情をくずし、うは、と笑って、

「ならば、わしから言うことはなにもないな。頭のいかれた老いぼれに話すぐらいじゃ、その日から、何事につけそのことを考え、思っていたんじゃろ？」

一瞬、ダリオは目が覚めたような顔になるが、すぐに視線を落とし、

「でも、その子はもうこの街にいないかもしれない」

「かもしれない？　それは、なにか確証あったのかなのか？」

「いや、」

「そういった言葉は、結果はどうあれ行動した者が言うべきものではないのか？」

ダリオの否定の言葉を遮った爺の苦言は、言葉をなくすには十二

分であった。

しかし、肩を落とすダリオを横目で確認すると、爺は一転して満面の笑みを浮かべ、

「とまあ、徳の高い者ならそう言うのかもしれんがな。わしはそうは思わん」

最後の言葉に、ダリオの視線が上がる。

「ぬしがなにもせぬまま、時を流すことが悪だと、わしは思わん。断言してもよいがな、月日が経てば今のぬしの悩みは綺麗さっぱりなくなる。『嗚呼、昔あんなことがあったなあ』なんてことを言いながら思い出すのが関の山じゃろうな。そこには後悔がついてくるかもしれないが、それは煩悶ではなく後悔じゃ。過去を悩むというのは、存外に難しいものでな」

「おれは、後悔はしたくない」

それを聞いた爺の表情はやはり笑みだったが、ダリオはその瞳の奥にどこか悲しいものを見るような色を垣間見た。

「そうか」

短くそう答えた。その言葉にどれだけの意味が込められているのか、ダリオにはわからない。

とにかく、答えは得た。

「じゃ、そろそろ行くわ」

「待たれよ」

居ても立ってもいられない、といった様子のダリオを爺は引き止める。

「今宵は標がなければ己が足すら見えまい。ほれ、わしの火を貸してやるう」

爺はそう言つて、手に持った燭台をダリオの前へと差し出す。

「ああ、そうだな。そんじゃあ」

ダリオが手を伸ばすと、差し出された燭台が引つ込んだ。

「バカもん。わしは『火』を貸してやると言つたんじゃ」

理解するのに少ししかかった。紛らわしい。

ダリオは、すっかり忘れていた自分の燭台を拾い上げて中の蠟燭を取り出すと、それを爺が持つ燭台に近づける。

蠟燭が合わさり、火が灯った。

「世話になった」

「いや。ぬしはなかなか面白い。いつでも歓迎するぞ」

「おれはもう勘弁してほしいけどな」

爺はおかしそうに笑い、ダリオは開き直ったような笑みを浮かべ返した。

星のない夜。汚れない流水が、止まることなく流れ続けている。

いい加減寢床に戻ろうと、ダリオはフォネツアーレの夜を歩く。相変わらず街が目覚める気配はない。どうやら、本当に早くに起きてしまったようだ。

ダリオは、寝直すべきか、と考える。今日は完全休業だと親方に言い渡されているので、思う存分寝過ぎすのもいいかもしれない。

そして、その後は

不意に、細い路地から風が這い込んできた。そして、ダリオの頭上からなにかが揺れる音。

視線と燭台を上へやると、そこには丸太を描いた、大きな垂れ幕がかかっていた。普段、この通りにこんなものは存在しない。

さすが建築通り。シンボルも派手だ。

そう考えて、ダリオは今日がなんの日かをはっきりと自覚した。

謝肉祭。象徴の日曜日。

祭りとしてはとても長い、異例の期間で行われる謝肉祭も、残すところあと三日である。

徒弟の仕事は、今日と明日はほとんどないと言っていいだろう。できることなら、それまでに見つけたい。

風が揺らす水音が、静かな音曲を奏でる。

ティナを捜そう。もうフォネツアーレにはいないかもしれないが、やれることはやるべきだ。

ティナと会って 仲直りがしたい。
ダリオは、そう決めた。

そもそも、謝肉祭というのは教会が定めた祭日ではない。

起源については言えば、諸説乱れ飛びキリがないが、現在フォネツアーレで行われている謝肉祭の本意は明瞭だ。ばっさりと言で言ってしまうえば、それは「食い溜め」である。というのも、謝肉祭の後は祈りと断食と慈善の期間が古くから存在するからだ。この期間は聖職者だけではなく、信徒すべてが行う習慣である。つまり、フォネツアーレ市民すべてが当てはまるといっていい。ただひたすらに心安らかに節制と回心に努め、誠実に神に祈りを捧げる

なあんで、かつこつけようが、断食すれば当然腹は減る。そして何かを信じたところで腹は膨れない。腹が減るとイライラする。なぜ断食などしなければいけないのか。「あいつが悪い」と指を差さなきゃ気が済まない。

そう、元を正せば教会が悪い。そんなものに巻き込むなど言いたい。言いたいのだが 人如きが神の教えに逆らえるはずもない。故に教会を不審するという前提が、彼らにはない。そうなると必然的に、生贄が必要になる。そして、それはとても自然な流れで、元首をトップとした評議会 つまり貴族へと、怒りの矛は向いた。

まったくもっていい迷惑である と、貴族たちが実際にぐうたれている間に、瞬く間に国の財が傾き、反乱の匂いが漂い始めた。悪役を見つけた民衆の動きは極めて迅速である。

こりゃあいかん、と慌てた貴族たちが三日三晩の会議の末に生まれたものが、もとからあった謝肉祭という民族風習を、大規模な祭りへと変革することであった。冬越しする野生動物を彷彿とさせるこの策は、とんでもない愚策と思われていたが、意外にも大受けであった。

よつするに、うまいもんが食べればなんでもいいのである。

かくして、この問題は丸く収まるに至る。

ただし、教会は度を越えた贅沢な行為を禁じているため、名目上は来たる断食期間のために食肉を退ける祭り、ということになっている。

ところで今、ダリオは古びた酒場の裏手を歩いており、壁越しから爆音としか形容しようがない喧騒が聞こえてきて、顔を顰めている。

少しだけ中を覗いてみよう。酒場には数名の常連客だけがいて、これでもかと薄められた酒を実にまずそうに飲んでいる。カウンターの内側には店主と思われる親父がおり、寂れた雰囲気の中かでも、不気味なほど上機嫌である。なぜか客も店員も、騒音など聞こえないといったそぶりである。疑問。そこで、さらに注意深く観察してみると、わかることがある。

店内の面積が、外から見る酒場の面積よりも、明らかに狭い。

これを指摘すると、店主はその昔この場所には罪人が埋められており、その厄を避けるために立入り禁止の魔除けの部屋があるのだと恐々と語るだろう。大抵の客はそれでびびって何も聞かなくなる。しかし、稀に向こう見ずな奴がさらに突っ込んだことを聞いてくることがある。部屋の中はどうなっているのか、と。

すると店主はこう答える。

それは、神のみぞ知ることだ。

さて、ダリオは路地を抜け、富裕区近くのメインストリートへと出る。そのまま嫌な顔ひとつせず人垣の中へと入っていき、しきりに顔と視線を動かしている。そうして、あらかた周囲を見終えると、ため息をひとつ吐き、また路地の中へと消えていく。先ほどから、こんなことを何度も繰り返している。

ティナを捜しているのである。

しかし、女の子一人をあてもなく捜して見つけられるほど、フォ

ネツアーレは小さい都市ではない。ダリオが思いつくのはせいぜい大聖堂の中だが、もしそうなら手の出しようがない。結局、こうして人が多い場所をしらみつぶしに回るしかないのだ。だが勝算は一応あった。この街を案内したときのティナは、見る物すべてがはじめてといった感じだった。だからティナが祭りを見物しに出歩いている可能性は、十分にあると思うのだ。

再び路地を抜けたところで、三練の鐘が鳴った。

三休の鐘と呼ばれるこの鐘も、今日に限ってはまったく別の意味を持っている。

そう遠くないどこかから、歓声があがる。

象徴の日曜日。そのパレードが始まる。

謝肉祭のメインイベントとも言えるこのパレードは、自らを象徴するものを身に付け、政庁であるコルヴァオーネ宮殿からメインストリートを堂々と行進し、フォネツアーレ内をぐるりと一周する、というものだ。昔は元首を筆頭とした貴族しかパレードに参加できなかったため、何ともはや民衆の気分を盛り下げるものだったらしい。金持ちの自慢など見ても、面白くもなんともないに決まっていた。

しかし近年になると職人の立場がよくなり、名の通った職種の親方が参加できるようになった。それからというもの、パレードを見ながら民衆は倍以上に増えた。職人は市民にとって身近な存在であったし、なによりもその象徴の色鮮やかさは、祭りにふさわしいものだからだ。

去年の謝肉祭ではビアンコの鎧職人がすべての攻撃から身を守ると触れ込んだフルプレートを全身に纏いパレードに参加し、道程の半分もいかぬまま、鎧のあまりの重さに途中退場したという話は今でも笑い種になっている。ちなみにそのときの鎧は、皮肉にも鎧飾りとして貴族に人気を博した。

見に行くか。

ダリオは考える。ロツソの仕立て屋の親方、マッシュ・ブロスキ

も真っ赤なマントを装い、そこにいるはずだ。本人はかなり渋っていたが、ギルドの指名なので仕方なく参列することになったという話だ。仏頂面の親方を見るのも悪くない。

それに、ティナもそこにいるかもしれない。

そんな、都合のいいことを考え自分を納得させてから、ダリオはぐるりと方向を変え、

回れ右をしたところで、唐突にサンティが視界にはいった。

ダリオがいることに気づいていないようで、程なくしてその姿は路地の中へと消える。

「なにやってんだ、あいつ」

あまりに突然のことだったので、しばらく呆然と立ち尽くした後、そんな言葉が漏れた。

不審、というほどではなかったが妙だった。あの路地はパレードの行進ルートとはまったく別の場所へと通じているし、なにより動きに迷いがなかった。ここからでも聞こえてくる甲高い歓声や口笛を、まったく気にしていなかったのだ。

それが気になって、ダリオはサンティの後をつけることにした。早足に路地へと入り、少し進んだところでサンティの背中が見えた。追いついて声をかけよう。なんてことは一瞬たりとも思わず、すぐさま身を隠して一定の距離を保ちながら、その後についていく。

幸い、このあたりの路地はダリオがよく使っている道なので、姿を見失ってもある程度の足取りは予測がついた。

だから、サンティが両替商の看板がある角を右折したところで、どこに行こうとしているのかもわかってしまった。

港だ。

そう確信した途端、まるでダリオの心を読んだかのようなタイミングで、肩を叩かれた。ダリオが反射的に振り向こうとして、

振り向きざまに、顔面に拳が落ちてきた。

いきなりぶん殴られるなど予想できるはずもなく、ダリオは簡単

に身体の支えがきかなくなつて、叩きつけられるような勢いでひっくり返る。加えて、すぐ側に看板があるのがまずかった。倒れ際に巻き込んでしまい、大きな音を響かせる。

前を歩いていたサンティが振り返った。

「サンティよお、つけられてんじゃねえよお」

まだ焦点の合わない視線を声のほうに向けると、そこにはまるで見覚えのない男がいた。目つきも体つきも細くて長い、明らかにダリオよりも年上だ。旅商人がよく使う、商隊の銘がはいった印章を腰に身に付けているが、こいつを商人だと思ふ奴はまずいまい。

サンティの仲間。盗賊か。

何度もまばたきをしているかのような眩暈を覚えながら、ダリオはそんなことを考え、

「またも突然に、背後から脇腹に力任せの蹴りが飛んできた。」

今度は明確な痛みを伴った衝撃だった。ダリオはたまらず横に倒れ臥し、うめき声をあげる。

「細い男がサディストの笑みを浮かべ、」

「うへえ、容赦ねえなサンティ」

「あんたには言われたくないな」

頭上からそんな会話が聞こえてきた。

ダリオは痛みを悶えながら、首だけを傾けて見上げると、

サンティと目が合った。

そこに見たのは、今にも泣き出しそうな表情だ。

だがそれもほんの一瞬の出来事で、すぐさま強い意志がサンティの瞳に宿る。ダリオはそのさらに奥、そこに檻の姿を確かに見た。

「なあ、こいつよお、俺たちのことを知っててつけたのか？」

細い男の声色が少しだけ変わった。頭の整理がついていないダリオは気づいていないが、男は片手を後ろに回し、ナイフに手をかけている。

それで、サンティは覚悟を固めた。

なんの言葉よりも先に、ダリオの顔面を蹴り上げた。

避けられるはずもなく、もろに食らった。勢いで転げ、悲鳴を上げることもなく、ただ蹴られた衝撃で吐いただけといった感じの放屁のような息が漏れた。先ほどよりもずっと苦痛に満ちたうめき声を上げる。

「いや ついさつき、歩いてたら因縁つけられたただけだ」

細い男は、微妙な表情でふうん、と相づちする。

なおも一方的な暴力は続いた。サンティは、無抵抗のダリオの顔だけを蹴り続ける。次第に顔が腫れ、口や鼻から血が飛び出る。いよいよ危ないのか、痛みに自覚がなくなり、自分を蹴ってくる靴を見て ずいぶん汚い靴だな、なんてことをダリオは考えている。

細い男が、ようやく満足げな表情をして、

「 まあ、こんなガキ一人に気づかれても問題ねえか」

「 当たり前だろ。 おい、」

ダリオはサンティに胸ぐらをつかまれ、無理矢理に上体を起こされる。口の中が切れているのか、息を飲み込むと血の味がした。

「 わかったか？ てめえとおれじゃあ、住む世界が違うんだよ」

正直、意識が朦朧としていて、言葉の半分の意味も拾うことはできなかつた。それでもダリオはにらみつけるように視線を動かす。

サンティの瞳の奥に、臆病者の色が滲んだ。

それを見たダリオが、何事かを口にしようとして、

それを遮るために、滝のような拳が横つ面めがけて落ちてきた。

言葉はなにひとつなく、何発も何発も、容赦なく殴られ続ける。

そのうちに、細い男がそれを制止した。

「 おい、そのへんにしとけ」

そう言っつて、親指で背後を差す。そこには、遠くから様子をうかがっている人影があつた。

「 ああ、そうだな」

そう言っつて、サンティはあっさりとダリオから離れ、その場から去ろうとする。

ダリオは横倒れになったまま、目玉だけで見上げる。

「て、め……おぼえ、てる」

辛うじて発した、かすれきったその言葉に、サンティだけが振り返った。感情を殺した表情で、ダリオを見下ろして、

投げ捨てるように、こう言った。

それは、

「もう二度と、おれに近づくな」

別れの言葉だった。

仲直りの方法(3)(前書き)

> i 3 6 9 7 9 | 4 3 0 3 <

ILLUSTRATION 一色恋

仲直りの方法(3)

祭りの熱は冷めることなく一夜を乗り越え、新しい祭りが顔を出す。

ちょうど、四練の鐘が鳴り終わったところだった。

寝てればよかった。

朝方に落ち着いたはずの熱がぶり返ってきて、ダリオはたまらず近くにあった石段に腰を下ろして一息つく。通行人の盗み見るような視線がこちらへ向いているのがわかるが、それを気にする余裕すらなかった。ぐ

ったりと頭を垂らして、何度も深呼吸をしている。

ティナを思う気持ちがないわけではないが、それ以上に自分に力がないことを認めたくないから、意地になってこうして外に出てきたのだ。

その結果が、これである。

利己的で子供のような思考。強い意志を持って行動しているわけではない。それを証拠に今、無理して外出したことをかなり後悔している自分がある。

情けない　と思うことすら情けなくなってくる。

昨日の決意など、すぐに風化してしまう。それでも自分に対する誓いを破りたくないから、こうして真っ黒な思考をすることで、せめてその欠片だけでも残そうとする。

明るい決意は、暗い思考の中でよく光るから。

肩の力が抜けて、大きなため息。なんとなく熱が下がってきた気がする。心は沈んでいたが、気分はずいぶんよくなった。

顔を起こすと、ダリオの眼前に祭りの風景が広がる。

謝肉祭。狂乱の日曜日。

明日は祭りというよりも、主に片付けやその後に控えている典礼の準備を行う日なので、実質今日が祭りの最終日と言っていい。マーケットやパレードなどの催しはなく、狂乱という名の通りに、狂ったように騒ぎ

続ける日。今も、そこらじゅうから喧騒が聞こえてくる。

実を言えば、参加者の数だけなら昨日のほうがはるかに多かったりする。通例として、昨日から今日にかけては、夜通し騒ぐものだからだ。もちろんそんな派手な飲み食いは教会から禁止されているので、こうして

表を歩いている限りでは、そんな様子は塵のひとつも見えない。

しかし、それはハリボテでできた祭りの姿だ。

中の空気が逃げることはない、しっかりと扉があるならどの酒場でもいい。適当な酒場を選んで、試しに扉を開けてみれば、そこには匂いだけで酔ってしまいそうな酒という酒が転がっている。だというのに物音

はひとつもなく、死体置き場を連想させる有り様で、酒場を埋め尽くすほどの「祭りの敗者」が、屍のように眠りこけているのだ。

今日騒いでいる連中は、そうした祭りの残骸を乗り越え今もなお、狂ったように祭りの中に身を投じているのである。そんな奴らだけで行われる祭りが、騒がしくないわけがない。すなわち、狂乱の日曜日こそ謝肉

祭の最高点なのだ。

さて。

遠目から馬鹿騒ぎしている連中を見ていたら、ダリオは自分の悩みがともちつぽけなものに思えてきた。深く考えすぎなのかもしれない。

ティナを捜していたら、体調が悪くなった。

ただそれだけだ。

そう思うと、それまで重かった身体が軽くなった気がした。立ち上がってみる。とくに眩暈もなく、吐き気や悪寒もない。いけそうだ。

問題は、大聖堂以外にテイナの居場所に心当たりがないことだが、このまま座り込むよりはずっとマシだろう。とりあえず教会区を中心に回ってみるしかない。

ダリオがそう思ったそのとき、すぐ側を横切った通行人と目が合った。それはほんの一瞬で、まるで恐ろしいものでも見たかのように、すぐに目を逸らされてしまった。

まあ、これじゃあな。

ダリオは自分の顔をそつと触ってみる。それだけでも針を刺したような痛みが走ったし、熱も帯びていた。これでも腫れはマシになったほうだ。しかし、痣だけはどうにもならなかった。顔のいたるところに青黒い

斑紋ができている。これを見て驚かないほうがどうかしている。

昨日は本当に酷い目であった。

ダリオはふいに、結局パレードを見ることができなかったことを思い出した。どうしても見たかったわけでもないくせに、今思うとものすごく見たかったような気がしてくる。

あの野郎。

ダリオはサンティのことを思い出すと、子供のような妄想を始める。想像上の自分は何んでもできて、これ以上ない方法でサンティに「仕返し」をするのだ。

そんな不毛なことをもりもりと考えているうちに、ある疑問が浮かんだ。

そういえば、サンティはどこへ行くこうとしていたのだろう。

確か　そう、港へ行くこうとしていたのだ。

それで、

港。

突然、記号が繋がった。

他のことは何も考えられなかった。ダリオは身体を反転させいきなり飛び出し、つんのめりながら人垣をかき分ける。通行人にぶつかって背中から罵声が飛んできたが、一文字だって頭の中には入ってこない。真っ

直ぐにその場所へと向かう。

どうして今まで気づかなかったんだろう。

心当たりがないなんて、嘘だ。

大通りを走り抜け、細い路地に入ろうというところで、ダリオは急に心細くなった。

背中から聞こえてくる喧騒から遠ざかることに、恐怖に近い感情がわいた。なぜそんなことを思ったのか。ダリオはその感情の正体を、言葉にすることができない。

振り向くな。

一瞬だけ目を瞑って、開いた。足に力を込めて走り出す。

目指すはフォネツアーレ港。貿易に使う布や革を保存するための倉庫　その屋根の上だ。

走り、過ぎていく風景。入り日に照らされたコートレディアの海を見て、同じぐらい眩しかった笑顔を見せてくれたことが、目の前の景色と同じように頭の中を駆けていった。

ティナはきつと、そこにいる。

当たり前だが、港の近くは海が一望できる場所が多い。そのため祭りのときは、即席のイスとテーブルを用意して、少数で静かに酒を飲む者がそこらじゅうにいる。

だからダリオは、人に見つかることなく屋根の上に登るにはどうすればいいかと考えていた　のだが、いざ倉庫の前まできてみれば、人影はひとつも見当たらなかった。

代わりに、そう遠くない場所から幾重にも折り重なった人声が聞こえてくる。方向からして、荷揚げだろうか。かなりの人数がそこに集まっているようだった。

気になったが、都合がよかった。

今のうちに行こう。

ダリオは息を切らしながらも、早足で倉庫の隙間へ潜り込む。壁の外側にかけられた梯子に手を置いて、長い深呼吸した。胃が押されるように感じる原因は、息を切らしているだけではないと思う。

登った。

屋根の上に、フォネツアーレの街と海が見える場所に出た。

そして、ダリオの心は停止した。

そこにティナはいなかった。その代わりに、信じられない光景が目映った。

海辺の倉庫だ。当然、潮風があつて建物の風化は早い。

ティナとここに来たときも、屋根の上にはレンガの破片が無数に散らばっていた。

その破片が、無数の山となって積み上げられていた。

山の高さはダリオの脛ほどあり、それが病的なまでに均等に並べられているのだ。

ダリオは想像する。女の子がここで一人、落ちている破片の一枚一枚を手にとって、積み上げていく姿を。想像する。ひとつひとつの山を平等にしようとする、その表情を。想像する。積み上げた山が不意に崩れて

しまったときの、その心を。

「う」

我慢の限界だった。胃の中のもの喉へと迫り上がってくる。それをなんとか吐き出す寸前の所で堪えて、一気に飲み込む。胃の中へと戻っていく感覚が、とてつもなく不快だった。

なんだこれは。

自然の成り行きでこのレンガの山ができた　なんてことはあり

えない。明らかに人為的なものだった。目の前のこの光景は、確かな意志をもって作られたのだ。

そして、この場所でそんなことをする人物なんて、ダリオは一人しか知らない。その想像は、たぶん、とかそういう次元ではなかった。

確信だ。

これをやったのは、ティナだ。

そして、ティナをここまで追い込んでしまったのは、

おれか。

そう考えた途端に、足が震えだした。震えを止めようと太股を押さえてみるが、目の前の光景がそうはさせてくれない。

ダリオが真つ先に感じたものは、後悔や自責といった感情ではなかった。

記憶の底から、昔聞いた「悪罰聖言」の話が再生される。

罪人には罰を、聖人には言葉を。

罪人は、御使いによってその魂を燃やされる。

ダリオは自分の胸の内を、はつきりと理解した。

己が身に取り憑こうとしているのは、純然たる恐怖だ。目の前のレンガの山は、自分を焼き殺そうとする無数の炎に違いなかった。

その恐怖を動力に、声を上げて逃げ出したい衝動がわいたが

そうはならなかった。

別に、勇気を奮い立たせたわけではない。

今この場で恐怖に負けて逃げ出すよりも、ティナを置き去りにしたあの日あとの後の悔恨のほうか、はるかに恐ろしかったのだ。逃げ出すのはもうごめんだった。

だから行き場を失った恐怖は、引きつった笑みとなって浮かび上がってきた。

自分の描いた想像に、呆れ果てた笑みではない。

自分の描いた想像を、嘘にするための笑みだ。

ひととき強い潮風が吹いた。小さなレンガの破片が山から崩れ落

ちるのを見て、ある考えがダリオの脳裏をかすめた。その考えの先にあるものが、天国なのか地獄なのか。今はまだわからない。

次いで、ものすごく間抜けなことを思った。

ダリオは今度こそ、呆れた笑みを浮かべた。

これはもう、謝って済む問題ではないかもしれない。

日はまだ高く、天を仰いでみても視界には青々とした空しか映らない。

祭りの狂気が日暮れを遅くしているのかもしれない、とダリオは思った。

屋根の上から降りて路地の隙間から顔を出すと、背を向けた二人の男がいきなり目の前に現れて、ダリオは思わず身を隠した。しかし、よく考えれば背を向けているのだから今がチャンスだと思い直して、もう一度顔を突き出すと、

「それにしても災難だったなア、ニコラの奴は」

「ああ。正直あいつのことは嫌いだったが、今回ばかりは同情しちまうよ」

二人の男は、足を止めてずいぶんと熱心に話し込んでいるようだった。体つきがいいし、水夫だろうか いや、そんなことよりさつさとここから立ち去ろう。ダリオはそう思って、路地から一歩踏み出し、

「まさか、倉庫に盗みに入った盗賊たちとばったり会っちまうなんてよ」

次の一步は、踏めなかった。

「命に別状はないみたいだが、手足の骨を折られちゃったらしいぜ。あいつはもう水夫どころか、まともに働けねエな。いや、それどころか、まともな生活すら送れないかもしれねエ」

「いっそ殺されちゃったほうがよかったかもな」

「ちげえねエ」

ダリオは誰かに足を掴まれているかのように、その場から動けないでいる。そのくせ頭の中は考えることを止めようとしめない。ここに来たとき、近くで人が集まっていたことを思い出す。

顔の腫れが痛むのは、海からくる潮風が染みるせいだと思いたかった。

「押し入られたのは、ブルーネイ家の倉庫のひとつだった？」

「ああ。盗られたもんは蜜蝋や香辛料みたいな、軽くて持ち運びやすいもんばかりだな。どうやら港から小舟で北上して、イストーラあたりで船を降りたらしい」

なるほど。海から逃げれば正門の検品は潜り抜けられる。しかし、短い距離とは言え小舟で海を移動など、危険にもほどがある。

いや、危険だからこそ、実行したのだろう。盗賊というのはそういうものだ。

「なるほど、それじゃあ重いもんは持っていけねエか」

「それでも気づくのが早ければ、とっ捕まえることもできたんだろうな。ニコラをわざと離れた場所まで運んで、特定がずいぶん遅れた。全容に気づいたのは今日の朝。だから盗賊の方はもう諦めてる感じだな。それ

よりも、このヤマに手を貸した馬鹿を血眼になって捜してらあ」

そのあたりから、だんだんと声が遠くなるのを感じた。見れば、二人の男が歩き出していた。

それでもダリオの足は動かない。

「ああ。倉庫の扉、壊されたわけじゃなかったしなア」

「あの鉄扉は大砲でも撃ち込まない限り壊されねえよ。手際の良さや逃走経路といい、ありや誰かをたらし込んで、カギを閉めずに開けっ放しにしておいたんだろうよ」

「なるほどなア。頭も回るなんて、おっかねエ盗賊だ」

「結構な人数だったようだしな。ところで、密告者の奴、いくらもらったと思う？」

「１フィル」

「ばあか。フィル金貨なんて持つてるなら、盗賊なんてやってねえだろ」

笑い声は遠ざかり、ついには海からの風に流されて聞こえなくなる。

それでも、ダリオは動かない。

ぎり、という音がした。知らず奥歯を噛みしめていることに気づく。

裏切られた、とでも思っているのか？

先に裏切ったのは、自分のくせに。

サンティが、見知らぬ誰かを痛めつけている映像が脳裏に浮かぶ。それがやけに鮮明なのは、自分も似たような目にあっただろうか。

似ているということは、同じではないということだけだ。

まあ、よっぽどのがなきや、挨拶ぐらいはしてから出て行くつもりだ。

再会したときの、サンティの言葉を思い出す。サンティにとって、赤の他人を傷つけることは、よっぽどのことだったのだろうか。それとも日常の出来事ではないのだろうか。

もう二度と、おれに近づくな。

それが答えだった。

晴れ渡った空に、海鳥が悠々と飛んでいるのが見えた。

そして、ダリオは動きだす。

工房の自室に戻るころには日は沈む寸前で、藍色の空がフォネツアーレの都市を包んでいた。

ダリオは自室に戻るなり、寝床に転がり込んだ。端から見ればそれは気を失って倒れたとしか思えないような勢いだ。その拍子に布の隙間から干草が飛び出てきて、こそばゆさと痛み中間ぐらいの感触が肌にまとわりつく。

逃げるように仰向けになって　それきり、死体のように動かなくなる。

身体の一部が欠けているような、痛みのない喪失感。ため息すら出ない。

真つ黒な夜の足音が聞こえてくる。

いつものように上掛けに包まる気力もないのか、ダリオはたいして高くもない天井を虚ろな目で眺めている。

迫ってくる闇と同じ速度で、祭りの気配は消えていく。

祭りは終わったのだ。

しかし、本当に祭りは終わったのだろうか　ダリオはそんな疑問を持つ。

明かりは消え、笑い声はひとつとして聞こえてこない。昼に騒いでいた連中も、さすがに力尽きたのだろう。

いや、

全員が、まったくの同時に力尽きた、ということとは考えづらい。きつと、まだ騒ぐ元気のある奴もいる。しかしそういう奴も、一緒になって倒れるのだ。寝たふりをして、気持ちよさそうに寝ている奴をこっそりと

見ながら、いずれ眠りにつくのだ。

祭りとは、そういうものだ。

ダリオの口元に、自嘲するような薄笑いが浮かんだ。

ならば、やはり祭りは終わっていないのだろう。

思い出すのは屋根の上。レンガの山に風が吹き、小さな破片が少しだけ崩れた、あの瞬間だ。

海沿いで、しかも屋根の上だ。強めの風なんて珍しくもなんともない。

それなのにあの瓦礫の塔は、ぞっとするぐらい等しく積み上げられていた。

つまり、ティナはごく最近まであそこにいたのだ。

昨日か、もしかしたらダリオがあそこに着く数時間か前まで。

もちろんダリオは喜んだ。ティナはもうフォネツアーレにいないのではないかと思っていたし、いたとしても見つけ出すなんて無理だと考えていたから。

やっとティナと会える。

そう思っつて、そして、そこから先は何も思いつかなかった。

ティナと会っつて、どうすればいいのか。それがまったくわからない。

やっぱり、まずは「ごめん」だろうか。

ティナはそれにどういふ返事をするだろう。その返事に、自分はと言おう。

そんなことを考えていると、ふと水の音が耳に流れ込んで目が覚めた。ため息が漏れる。自分はいつもこうなのだ。今日は親方にあの話題を言っつてみよう、とか、ジヨシユアの兄貴にあのことを教えてもらおう。

う、とか。事前に話を用意しておいて、そのくせいざとなるとまるで「今この瞬間思いついた話」みたいに話しはじめる自分がとつもなく嫌いだった。

ようするに、相手のことを見ていないのだ。

自分勝手な想像の押しつけ。わかってる。

そうわかってるくせに、今のダリオは「ティナとどうすれば仲直りできるか」ということを、いつまでもいつまでも考えている。

目を閉じて瞼の裏に「起こり得る事態」をいくつも描くことを、止めようとは微塵も思わない。

バカなことを考えるな　　そう忠告する、もう一人の自分を徹底的に無視した。

もう、街は深い夜に包まれている。

ときおり雲がさつと引くと上弦の月が姿を現し、しばらくするとまた雲の中へと消えていく。

まるでコインの表と裏のように、フォネツアーレは黒と青の闇夜

を繰り返す。

答えは、ついにいなかった。

習慣とはおそろしいもので、ろくに眠っていないくせに寝坊することなく、いつものように起床することができた。立ち上がったも離れてくれない眠気を引きずりながら、ダリオは壁に片手をついて階段を降りる。

裏口から外へ出て、井戸で顔を洗うついでに、水鏡に映る自分の顔をじっくりと覗いてみる。

やはり二日で治るはずもなく、腫れも痣もまだ目立つ。

ダリオはこんな面でテイナと会うことになつたら格好悪いな、と思いで自分が色気づいてるような気がして、とても微妙な表情を作る。首を振り、雑念をかき消すように手のひらですくった水を顔に叩きつけると、ものすごい激痛が顔面を襲って、ダリオは一人転げ回る。アホである。

ひとしきり悶えて、落ち着いたところで工房へ戻ることにする。不意に歩みが止まり、静まり返ったフォネツアーレの街に違和感を感じた。なんだろう。

すぐに違和感の正体はわかった。

ここ数日、この時間帯でも街は騒がしかったから、静かな街に違和感を感じたのだ。

今日は近くにある教会所に行き、過去や謝肉祭の汚れを告白し浄化する日だ。まあ、そのほとんどは「祭り中に食べ過ぎてしまった私を許して下さい」という、なんとも情けない告白であったりする。中には頭痛や

胃もたれを天罰だと勘違いし、泣きながら許しを請う者もいるが、もちろんただの飲みすぎと食いすぎである。

他には祭りの片付けと、ごく少数の者が未だに飲み食いをつけていたりするが、それらは残滓のようなもので、街は確実に日常へ戻ろうとしていた。

裏口の扉に手をかけたところで、ダリオは唐突に首を傾げた。

今日はいつたい、なんという日だったか。

しばらく考えてみたが、結局思い出すことはなかった。

そして、三練の鐘が鳴る。

走った。

昨日は、四練の鐘が鳴った後だった。

出会ったときは、三練の鐘が鳴った後だった。

確実ではない。しかし、もしティナがああ屋根の上にいるとしたら、それは三練の鐘が鳴った、この時間帯だという確信がダリオにはあった。

それをうぬぼれと言えば、確かにそうなのだろう。

とにかく走った。

工房を出るときに親方に怒鳴られ、通行人にぶつかり睨まれ、露天商の商品に蹴躓きそうになって怒りを買う。そのどれもが背中では起こり過ぎ去っていく、過去の出来事だった。

港からもっとも近い中流区にはいったところで、呼吸の乱れに限界を感じたが、それでもダリオは走ることを止めなかった。今まで生きてきて、こんなに必死に走ったことはない。

だから、もしこの先にティナがいたらどうしようと考えた余裕はなかった。

あるいは考える余裕を作りたくなかったから、走っているのかもしれない。

目的地までもういくらかもない。ダリオは少しだけペースを緩めて周囲を見渡してみる。近くに人影はない。これで最後だとばかりに息を止めて走った。ペースを一切落とすことなく、倉庫と倉庫の間に滑り込んだ

ところで、ダリオの足はようやく止まった。

ゴールだ。

狭い路地裏を、ふらつきながら三歩ほど進む。少し休もうと壁に背中を預けると、いつきに力が抜けてずるとその場に座り込んでしまう。胸が苦しい。呼吸が整わない。吹き出る汗が止まらない。それなのにダリオの顔は俯くことなく、空を見上げている。

いるのだろうか。

ここからではどんなに目を凝らしても、わかりそうになかった。

ダリオは腹に力を込めて立ち上がり、梯子に手をかけた。あごの先から汗がしたたり落ちる。今休んで冷静になってしまったら、これ以上先に進めなくなってしまう。そんな錯覚にとらわれた。

悲鳴を上げる身体なんてお構いなしに駆け登った。

そして、屋根の上へとたどり着く。

ダリオは息を切らしながら、コートレディアの海を見る。それから自分が先ほどまでいた場所を見下ろして、そしてフォネツアーレの街が見える方角を見た。

そこで立ち止まり、目を閉じた。

目を開ける。

「見つけた」

言葉が漏れたことに、自分でも驚いた。

クレメンティナ・リサリーティは、背を向けて、まるで石像のようにフォネツアーレの街を見ている。海鳥の糞などで汚れている屋根瓦の上に、遠慮なく腰を下ろしているのを見て、ダリオはこんなときでも「上等な服がもつたいない」と思ってしまう。

ダリオの言葉に反応したのか、それとも最初から気づいていたのか。ティナがこちらを振り向いた。無表情の間をおいてから、笑みすら浮かべて、

ただ一言。

「ダリオ」

安堵は一瞬だった。

なぜって、その笑顔の奥に、見覚えのある感情が映ったからだ。それは、出会ったころの、一番はじめに見たティナそのものだ。透明な表情　いや、今ならわかる。

これは、何かを見ているようで、何も見ようとはしていない表情だ。

ふとサントイのことを思い出した。あいつも同じ顔をしていたんだな　と、今さらに気づいて、それが少しだけ寂しかった。

ティナは呆然とするダリオを気にも止めず、口を開く。

「よかったあ」

その言葉と表情に、強烈な違和感を感じる。

そして、ティナは少し早口になって言葉を続ける。

「この前はここでさよならしたから、ここにいればまた会えるかなって」

ダリオは、自分が息を呑む音をはっきりと聞いた。

「　ここでさよなら？」

ダリオが絞り出すように出した声は、ティナには届かない。

「昨日とか、すごかったんだよ。すつごく人がたくさんいて、たくさん楽しそうな声が聞こえてきたの。ダリオも見た？　あれって、なんだったんだろう。ダリオなら知ってるかな」

言葉が出ない。そのくせ視覚だけはやけに鮮明で、ティナの頬がひくひくと小刻みに震えているのがはっきりと見えた。まるで、喋ることを自分自身に強いているように見える。

「昨日だけじゃなくて、ここ最近はずっとそう。毎日が騒がしくって、ここから見ているだけで、わたしも楽しくなれて。だから今日もなにかあるのかなあって見てたんだ」

時の流れに身を任せることは、悪いことではない言っていたクソ爺を思い出す。

それは、悲しいぐらいに正しいことだとダリオは思う。ティナの「嘘」をこのまま受け入れれば、時間はかかるかもしれないが、未

だ記憶にある、飾り気のない真っ白な笑顔を見れる日が、きつとまたやってくる。

しみつたれた後悔と一緒に。

「昨日は一番賑やかだったよ。まるで街が笑ってるみたいでね。自分はいったい何がしたいのか。ダリオはそれをようやく理解した。」

いい加減、認めようと思う。今自分が抱えている感情は、決してティナのためなんかではない。ただ後悔したくないという、自己満足だ。ティナを傷つけたことを、なかつたことにしたくはないという、自己主張だ。

その結果、さらにティナを傷つけて、二度と会うことはないかもしれない。

そうはならずに、ティナを傷つけることなく、仲直りできるかもしれない。

そのどちらにせよ、ダリオ・カルツァは自身のどこかに傷を作ることになる。それは絶対だ。

傷のない選択など、意味がないのだから。

「一昨日は大きな旗がたくさん見えてね、いろんなかたちをしてたよ。花とか、ドレスとか。よくわからないのもたくさんあってね、たとえばこんなかたちのが」

「ティナ」

思えば、彼女を名前と呼ぶことははじめてだと思ひ知る。

なにかの象徴を、空中で描いていた指がぴたりと止まった。

屋根の上から一人で見ていた謝肉祭を思い返しているティナ。

それをずっと辿っていつても、「わたしを裏切って逃げ出したダリオ」は、どこにもいない。

「なに、ダリオ」

寂寥に満ちた瞳と、どこまでも空っぽな笑み。

「おれの話、聞いてほしい」

「 うん、聞くよ」

いよいよ後戻りができなくなって、足が震えはじめた。理由は明白だ。

本当の自分を晒して、嫌われることが途方もなく恐ろしい。

この屋根の上で、ティナに言った言葉を思い出す。

そういうのは、自分にとつては大事なことでも、相手にとつてはどうってことないことだったりするんだよ。

無責任極まりない言葉。あの子の自分を思いつきりぶん殴ってやりたい。

それでも、ティナは信じてくれたのだ。

自分も信じようと思う。

「 ダリオ？」

少しだけ首を傾げて、ティナが不思議そうにこちらを見ている。

今の自分はさぞ情けない顔をしているのだろう。まったく。このままでは、あの子の秘密を打ち明けてくれたティナのほうがよほど度胸があったことになってしまう。

出発点は、男の見栄。

ダリオ・カルツァの話を始めよう。

「 二年前、父さんが死んだんだ。流行病で」

唐突に、ダリオは今日がなんの日か思い出した。

謝肉祭。懺悔の火曜日。

父さんが死んで、一瞬でいろんなものがなくなった。

夢も希望も 家も。

おれが住んでいたところは、ここよりもずっと東寄りです。教会の建物なんて祈る場所ぐらいいしかなかった。とにかく貧しい土地で、頼れる人もいなかった。一人で歩いていると、おかしなぐらい、みんな目を合わ

せようとしなかったのをよく憶えている。

孤児のできあがりだ。

見慣れた場所で路頭に迷うのが嫌で、なにより父さんが死んだことを認めたくなくて、気づいたら商隊の積荷に紛れ込んでた。あのときは、何もかもから逃げたかったから。

まあ、隣町についた時点で見つかったまっつて、すぐに放り出されたけどな。

最初は、死ぬことばかり考えていたと思う。

けど、そんな見栄はほんの数日だけだった。笑っちゃうよな。本当に死にそうだな、と思ったたら、死ぬのが怖くなっただ。

そう、死にたくなかった。

でもどうしようもなかった。なにも食べられないのがあんなに苦しいなんて知らなかった。苦しさのあまりに胸を引っ掻いたりしてさ、その痕は今も少しだけ残ってる。

そんなとき、パン屋が目についた。

どうしようも、なかったんだ。

横目でティナを窺うと、きょとんとした表情がそこにはある。感情がどこかに飛んでいるかのようには、顔面の変化がまばたきしかない。

「あのときのことを、後悔したことはない。パンを盗らなきゃ、おれは間違いない。飢え死にしていたらうしな」

ダリオはもう一度、ティナの様子を察しようとするが、眉のひとも動かない。

「そのときは、他に選択肢はないと思った。なんの能力も特権もない自分が生きるには、他人のものを掠め取るしかない、ってな」
海から吹く風に、ティナが目を細めた。レンガの山が崩れる音がする。

「とにかく必死だった。おかげで、今でも人や物を観察する癖が抜けてくれない。すべてがうまくいったわけじゃなかったしな。けど、役所にしょっ引かれることは一度もなかった。コツがあるんだ。盗

むときは一番

安いもの見繕って、最小限で済ますこと。そうすれば、もし捕まっても相手の心に少し余裕が生まれる。これぐらいならまあ許してやるう、って思うわけだ。それでもぶん殴られることはあったし、一度バレたら他の

街に移動する必要があった。積荷に紛れ込むのもコツがあつて、街の中でやつても成功率は低い。だから道中の休息所でじっと待って、いけそうなのがきたらそれに紛れ込んだ。そんなことを何度かやっていたら、盗

人の真似事もずいぶんと慣れたよ。　　慣れたら今度は、仲間が欲しくなつた”

いつの間にか、テイナが真剣な表情でダリオを見つめている。

きつかけは、餓死しそうになつていた兄妹を助けたことからだ。

自分と同じように飢えているのを見て、そいつらの気持ちがわかる。　　なんて錯覚したんだ。

兄は、自分よりもまず妹に食べさせてくれつて言つたよ。

それで、自分とはまったく別の人間だつてことを思い知らされた。それから先ははあつという間だつた。孤兒なんてそこらじゅうにいるからな。子供だけの盗賊団の誕生さ。みんな笑つてたし、うまきいつてたよ。　　最初のうちは。

人が増えれば力が增える。力が增えるつてことは、やれることが増えるつてことだ。いろんな奴がいて、いろんな考えがあつたよ。

英雄に憧れて義賊を気取つてた奴、大人を憎む奴、優しい奴、乱暴な奴、頭のいい

奴悪い奴。さつき言つた兄妹の妹のほうなんて、ずっとおれ達がつていたことを、ごっこ遊びだと勘違いしてた。笑つちゃうよな。

けど、今思えばその通りだと思う。おれたちのやつてることは、盗賊ごっこだつたんだ。

あのころは、高い木に登つただけで英雄になれたんだから。

対立、意見の食い違い、あいつが嫌いだと言いついで出してそれが連鎖する。結団と同じぐらいの速さで、亀裂は走っていった。崩れるのは時間の問題だった。

ああ。言っておくけど、おれは別に義賊を気取ってたわけじゃない。ただのこそ泥だ。人を直接傷つけるのが、どうしようもなく怖かっただけ。だから盗むときは襲うことはなく、誰にも見つからないように盗むことを徹底した。

みんなの前じゃ、「怖い」なんて口が裂けても言えなかったけど。でも、そんな虚栄もすぐに必要なくなった。

終わりの日はあっけなかった。その日、盗んだことがバレて団員の一人が、追ってきた相手をナイフで刺したのさ。

妹思いの兄が、妹を守るために。

おれは仕方ない、って思ったよ。兄のほつも、きつとそう思っていたはずだ。

でも、理由は関係なかった。

仲間の一人が、相手を刺すことで盗みを成功させた。

今まで抑えてきたタガが外れるには、十分な理由だった。

あとはもうめちやくちゃさ。暴力的な奴は真っ先にいなくなった。それが波及して、すぐにみんな離れていった。最後はどうなったかは知らない。

おれも、逃げ出したから。

気づいたんだ。いや、見て見ぬふりができなくなった。

このまま盗みを続けて、誰かを傷つけずに済ますのは不可能だつてことに。

おれは一人になって、今度こそ死のうと思った。自分は生きていても仕方のない人間だって。

だけど結局、それもできなくて、

気づいたら、泣きながら盗んだパンを食べてた。

それしか、生き方を知らなかったから。

もう何も考えなければいいと思った。だから、あのころのおれが何を考えていたのか、正直よく憶えていない。突然叫んでみたり、意味もなく雨に打たれたり、気絶したように一日中ぴくりとも動かなかつたりして

いたことは、ぼんやりと記憶にある。

そうやって狂ったふりをしながら、各地を亡霊のようにさまよって、

そして、別の生き方を教えてくれた、このフォネツアーレにたどり着いたんだ。

ダリオは天を仰いで細い息を吐く。涙が出ないのが不思議だった。「おれの話は、これで終わり。 と言いたいところだけど、実は続きがある」

ダリオがそう言うと、ティナが上半身を少しだけ前に乗り出してきて、口を小さく開けた。ダリオはそのまま少しだけ待つてみたが、言葉になることはなかった。

「つい最近 数日前の話だ。兄妹の兄のほうと、偶然再会したんだ。昔の面影なんてほとんどなくなつて、どこからどうみても『立派な盗賊』だったよ。もちろんおれは偶然なんて思わなかった。逃げ出したおれ

に復讐しにきたんだつて、そう思った。けどそうじゃなかった。あいつはおれを見て、昔のように『やっぱりダリオはすげえなあ』つて言うんだ。

その言葉が信じられなかった、そのときは。

そんな不審を抱いていたせいか、バチが当たったよ。あいつの仲間の盗賊に見つかつて、いきなり殴られた。殺されると思つたし、実際そうなつてたと思う。

でもそうならなかった。あいつが、助けてくれたから」

ダリオは自分の顔にそつと手をあてる。まだ痛みも腫れもある。他人から見ればずいぶんと酷い有り様なのだろう。目が合えば、逸

らされる程度には。

しかし、見た目ほどには酷くはない。

手足を折られたという、見知らぬ水夫を思う。

骨折はその後の生活に大きく影響する。事故によって折れた場合なら、うまく骨が折れて綺麗にくっつくことが稀にある。しかし、人の手によつて折られた骨は、完治することのほうが珍しい。盗賊のような粗暴な

輩にやられたものなら、なおさらだ。

なぜ、サンティは他人のふりをしたのか。

なぜ、顔ばかりを痛めつけたのか。

なぜ、自分にかけての優しさを、見知らぬ水夫にかけてやれなかったのか。

頭では理解している。きっと水夫をやったのはサンティではなく、仲間の盗賊なんだろうと。

わかつている。

それでもダリオは、途方もない悔しさを止められず、拭えないでいる。

救われた自分と、救われなかった水夫。

その理不尽を、恨まずにはいられない。安堵する己を、憎まずにはいられない。

「ティナ」

自分でもびっくりするぐらい、声が震えていた。それでも涙は出ない。

いつの間にか、ティナが今にも泣き出しそうな顔をしていた。自分の代わりに泣いてくれているのだ、とダリオは思った。

「聞いている通り、おれは無力で卑怯で臆病者で汚い奴だけど人は、別れに怯え続けることができない。」

なぜなら別れを知る人は、出会う喜びも知っているからだ。

「お前と、一緒にいたいと思ったんだ」

ティナの目から、涙が溢れて頬を伝った。我慢できずにしゃくり

上げだす。

ダリオは自分から、ティナのほうへと近づく。そうしなければならぬと思った。

「ティナ」

なんだ。傷つくのが自分なら、こんなにも楽なのか。

言える。

「ごめんな」

それは、抱きつきたかっただけではなく、顔を見られなくなかったのだらう。ティナは勢いよくダリオの胸に飛び込んで、子供のように大声で泣いた。

泣き続けるティナが、弱々しくダリオの胸を叩く。それは親方の拳骨より、サンティの蹴りよりも、ずっと痛かった。

ダリオは空を仰ぐ。雲一つない、嘘みたいな青空がそこにはある。未だ止まぬ泣き声が、あの青空に吸い込まれている気がした。それが許せなくて、ダリオはティナを強く抱きしめる。その胸の中で、ティナのささやきを感じた。

それは、

「ありがとう」

出会いの言葉だった。

雲一つない、嘘みたいな青空の日だった。

「おい！！」

商隊を示した旗が、南から吹く風にたなびいている。

辛うじて遠くからでも見えた。男はそれを認めると、声を上げて引き止める。

「いやあ、よかったよかった。いやはや、これも神の思し召し
喉に骨でも刺さったのか、そこで男は急に言葉を詰まらせた。」

それもそのはず。商隊だと思いついていた目の前の集団のうち、

誰一人としてとても商人には見えないからだ。全員が武器を携帯しているし、中には革鎧を着込んでいる奴もいる。誰がどう見たって、傭兵か盗賊に

しか見えない。

「こりゃあやばい。男はそう察した。」

「なんだ？」

男からもっとも近い奴が、声をかけてきた。商隊の中でもとくに屈強そう見える。殿は強者でなくては務まらない。戦術の常識だ。

「あ、いや。ええと　そ、そう。サンティって人は、この商隊にいますかな？　私は旅芸人のついでに飛脚をやってまして、届けもんがあるんです」

旅芸人の男は途端に態度をかえて下手になる。へへ、と笑う顔を無性に殴ってやりたい。

殿の男は眉を寄せて、後ろの仲間たちにそれを伝える。何度か言い合いながらも、一人が姿を消して間もなく、荷馬車から別の若い男が出てきた。日中だというのに寝ていたのか、大きな欠伸をしながら歩いてくる。

商隊はそれで用件は済んだとばかりに、馬を進ませる。

取り残された若い男は、尻目でそれを目視して、少しだけ寂しそうに目を細めた。

それはかつては共に歩き、立ち止まってくれる人がいた者の目だ。

「あなたがサンティかい？」

「そうだけど」

旅芸人の男の態度が急にでかくなった。取り残された男は、少年といってもいいほど若い男だったからだ。人を見かけだけで判断してはいけないと思ひ知らせてやりたい。

「いやあ、まさか会えるとは思ってなかったよ。あのダリオという少年も、北へ行くついでに、もしこのシンボルの商隊を見かけたら君に渡して欲しい物がある、としか言っただけだったしな。縁とは、

時に恐ろしくも

あると思ってしまうね」

旅芸人の男は商隊の印章が雑に彫られている木版を差し出すが、それどころではなかった。

ダリオ、という単語にサンティは息を詰まらせる。

「ダリオが？ おれに渡したいもの？」

「ああ、これだよ」

そう言つて、小さな袋をサンティに渡す。目立った汚れのない、小綺麗な麻袋だ。後から付け足したと思われる、一本の羽根を象つた刺繍が施されている。なんの鳥の羽根だろうか。

「開けても？」

「もちろんだ。それはもう君の物だよ」

サンティは落ち着かない様子で、袋の口に手をかけ、

「あ。断つておくけど、私は中身がなんなのか知らない。気に入つた相手の秘密は守る主義なのさ」

気に入らない相手の持ち物は、そのままパクっちゃうけどね

旅芸人の男はそう言つて、おどけた笑みを浮かべてみせる。

「依頼主であるダリオという少年は、この袋が一縷の望みだと言わんばかりの真摯な態度でね。それにも関わらず、私のような一介の旅芸人に託すなんて、まったくどうかしている。ああいうものを裏切るというの

は、なかなかどうして難しいものなのさ。わかつてやっているのだとしたら、彼はきつとペテンの神様に違いないと私は思うよ」

聞いてもいないのにぺらぺらと。正直、あまりお近づきになりたくない男だった。

サンティは愛想笑いだけで返答し、改めて麻袋の口に手を突っ込んでその中身を取り出した。

そこには

「おや、それは　パン、だね。しかも白パンだ」

言葉すら出ないサンティの代わりに、旅芸人の男がそう呟く。そ

の顔には期待はずれの色がありありと浮かんでいる。おおかた、もつとドラマのある物だと思ひ込んでいたのだろう。

「いや、なんとというか　うまそう、だね。うん。うまそうだ。君の好物なのかな、これは」

その質問にも、サンティはぴくりとも反応しない。

旅商人の男は怪訝な顔をするも、長くは待たず、

「それじゃ、確かに届けたよ。神のご加護を」

そう言つて、旅商人の男は立ち去つて行く。そのまま道を進もうとしたが、ふとこの先に柄の悪い商隊がいることを思いだし、回れ右をして、きた道を引き返していった。賢明な判断である。

さて。

ついにサンティは、ろくに舗装もされていない道の上に一人。相も変わらず、まばたきもろくにせず、石になつたかのように立ち尽くしている。

思ひ出すのは、仲間に痛めつけられた、運がないとしか言い様のない水夫のことだ。

誰かが気を失っている水夫を指差し、海に捨てよう、と言ひ出した。自分たちはこれから大きな盗みをやらかすのだから、証拠を残してはいけない、と。

もつといい方法がある。

遠く離れた場所へ捨て置き、この水夫を罠に利用しようと言ひ出したのは、他ならぬ自分だ。

水夫を運ぶという危険な役割も、自分が進んで引き受けた。

水夫を救つた、などとは思つていない。

むしろ、自分はその水夫を、より深い地獄に落としたすら思ひつてゐる。

それでも、生きてさえいれば

止まっていた時間が動き出す。サンティは手に持った白パンをまじまじと見つめる。

ふと、ダリオが自分に対して向けた、最後の言葉を思ひ出した。

おぼえてる。

なるほど。確かにこれは、これ以上とない「仕返し」だ。
サンティは大きく口を開けて、白パンにがぶりつく。

ゆっくりと、ゆっくりと、咀嚼して、

そうしないと飲み込めないとばかりに、天を仰いで喉を鳴らした。

「うめえなあ」

不思議なことに、遙か青から、大粒のしずくが落ちてきた。

天気雨だ。

手に持ったパンにも水滴が落ちてきて、もったいないと思う。サンティはそれでも、空を見上げることを止めない。

この雲ひとつない青空のどこから雨なんて降ってきてるのだろう。それが不思議で仕方なくて、サンティはいつまでも空を見続けている。

頬を伝う雨粒は、熱かった。

またかよ。

ダリオ・カルツァは、吐き捨てるようなため息をひとつ。

また「粗悪品」が見つかったのだ。今日はこれで三枚目である。

呆れて言葉もでないのか、無言で川運商のリカルド・バッチに押しつける。

「いや、だから俺に当たるなっつて」

「急いでるんだよ、今日は。予定が埋まってる」

「はあ、予定ねえ。女か？」

「アホか。親方が仕事を手伝えつてよ」

嘘は言っていない。ただ正確に言えば、親方の手伝いは四鍊の鐘が鳴ってからであり、この後はティナと会う約束をしているのだが。

「へえ。立派になってきたねえ、徒弟さんよ」

「まだ仕立てのひとつもやらせてもらえねえよ」

「いやいや、検品の速さもずいぶんマシになったし。混ぜりもんも見逃さなくなってきたじゃねえか」

それからリカルドは、わざとらしく声を潜めて、

「これは俺の勘だけだな、お前んとこの親方と織布工は手を組んでいて、わざと混ぜりもんをいれてるんじゃないか？ お前を鍛えるためによ」

「まさか。んなわけねえだろ」

そう否定しながらも、ダリオはリカルドの言葉を頭の中で転がしてみる。しかし一瞬で、やはりあり得る話ではないな、と結論づけた。あの親方にそんな優しさはない。

「あ。そういやお前に朗報があるんだった」

リカルドが声色を戻して、今思い出した、とばかりに声を上げた。

「なんだよ、朗報って」

「お前、小銭を貯めて素材を買いだいたいと言ってただろ」

「ああ」

ダリオは徒弟になってから、何かの拍子で自分の懐に入ってきた銀銭のほとんどは使わないで貯めることにしている。それというのも、自分で見立てた素材を買って、それを自由に仕立ててみたいと思っているからだ。

徒弟であるうちは、好きな服を仕立てるなんてことは、決してやらせてもらえない。だからダリオは、自分買い集めてしまおうという腹なのだ。別にそれを高く売ろうとか、そんなことは考えていない。ダリオにと

って、自分の思い通りの仕立てをする、というのは娯楽なのだ。

「今朝聞いたんだが、サネライアから良質の亜麻がかなりいい値で流れてきたらしい」

「本当か！？」

思わず、声が大きくなった。腰が半分浮いており、今にもリカルドに掴みかかりそうだったが、思い直して再び腰を下ろす。近場に

いた作業員の視線が痛い。

「値段は？」

リカルドがそれに答えると、ダリオは頭を抱えた。

「どうした？」

「足りねえ」

「あ？ お前、これぐらい持ってなかつたか？」

一瞬、ダリオは言葉を詰まらせるが、すぐに笑みを浮かべ直して、「いや、この前、白パン買ったんだよ。たまにはうまいもんを食いたくなつてな」

それを聞いて、リカルドは心底おかしそうな笑い声を上げる。

「おう、わかってるじゃねえか。やつぱ人間うまいもんをくわねえとな。それが人生の愉しみつてもんよ」

「ああ、まったく」

人生の愉しみ。いい言葉だ。
さて。

さしあたっての人生の愉しみは、この馬鹿笑いしている川運商からどうやって銀貨を借りようか、というところだろうか。

そのあとは、テイナの着ているあの服を一度じっくり見させてもらおう。前々から気になって仕方がなかったのだ。それが終わったら、親方にこつてり絞られるのも悪くはないかもしれない。

フォネツアーレの一日は、まだまだ続く。

少なくともこの青空と同じぐらいには続いているだろうと、ダリオは思うのだ。

I L L U S T R A T I O N
一色恋

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0957y/>

天使にしふくを

2011年12月11日12時50分発行